

建築学部

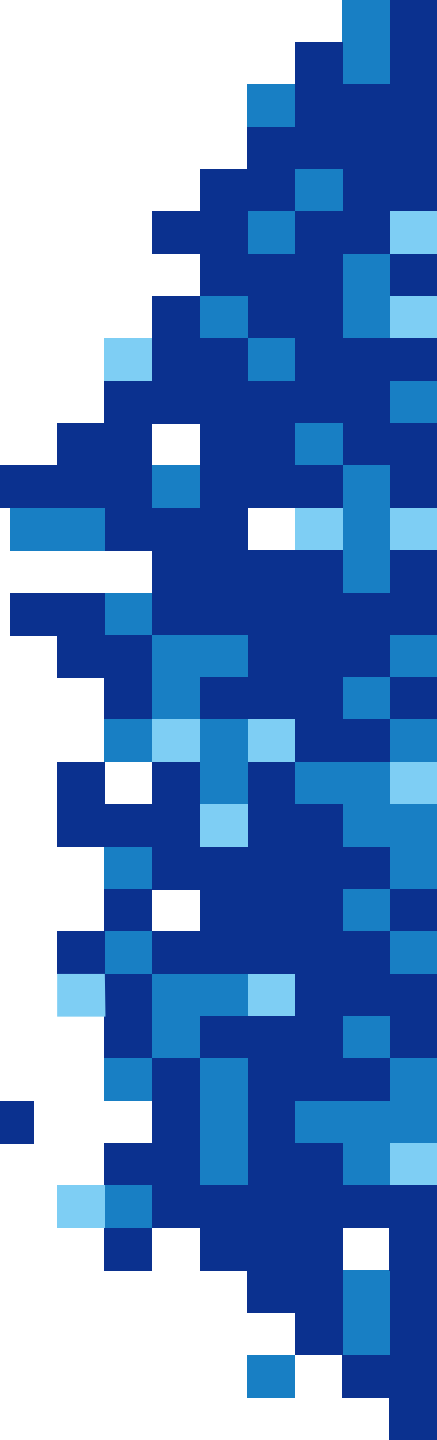
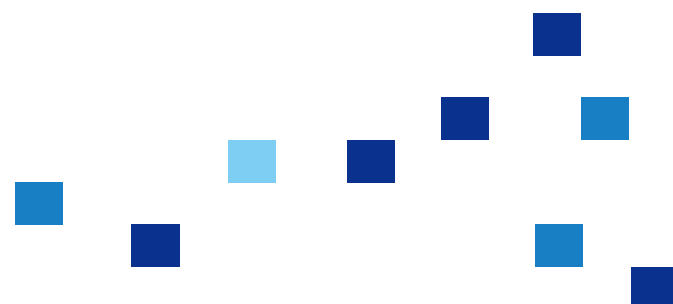
Active Learning Work

# Covid-19禍における学生とのALワーク



●● 結果報告書

2021/7/31 版





## はじめに

学生の皆さん、保護者の方々、そして、教職員の皆様には、新型コロナウイルス感染症対策についてご協力いただき、深く感謝申し上げます。

この度、建築学部では全学生および教員を対象とした新型コロナウイルス感染症に対するワークショップを実施しました。ワークショップは学生たちの声を集めるとともに、今一度、感染症対策への意識を向上させることを目的としています。ワークショップからは様々な声を集めることができ、学生の皆さんにとっては感染症対策を確認する良いきっかけになったのではないのでしょうか。

さて、この危機から私たちは何を学び、行動すべきでしょうか。一つはこのワークの中でも繰り返し記載されている「正しく情報を把握し、正しく行動をとる」ことです。SNS等の普及はとりわけ若い世代に新しい情報取得手段を与えましたが、感染症に対しては感情的な口コミよりも科学的、客観的な情報を把握することが重要です。このような情報の把握というプロセスは、感染症対策だけではなく、研究、仕事にも活かされる基本的な能力です。エビデンスに基づいた情報の把握に努めてください。

これらの情報を理解し、それを行動に移すという力が今回の新型コロナウイルス感染症対策では強く求められています。このコロナ禍で日々の感染者のグラフを見ない日はありません。グラフの上下に及ぼす要因は何でしょうか。感染者数を下げるためにはどうすればよいのか。その答えはこの新型コロナウイルス感染症との長い戦いの中で、すべての人が理解しているはずで、これからも感染を抑える行動を心掛けていきましょう。

その一方で、新型コロナウイルス感染症は科学や技術の限界も示しています。ワクチンが開発され、治療法についての知見も集まりつつありますが、特效薬はまだ見つかっていません。大学ではオンライン授業が急速に広がりましたが、テレワークの普及もあまり進んでいません。感染症対策についての「エビデンス」を示すべきとの声もありますが、専門家の中では既に十分な科学的知見は得られているようです。しかしながら、人々が感じる「不安」を完全に払しょくできるほど科学や技術は万能ではありません。

このためには、情報を作る側も受け取る側も、高い情報リテラシーが必要になります。情報リテラシーの基本は相互の立場の理解、おもしろいやりです。自己中心的な考えではなく、他者を思いやり、社会の一員としての責任を担う行動をこれからも心掛けていきましょう。

2021年7月

建築学部



## 本ワークショップ実施にあたって

### 目的

- ◆ 新型コロナ禍も長期化し、みなさんもさまざまな思いを持っていることと思います。現在、ワクチン接種が始まり、緊急事態宣言も撤回されましたが、東京では4回目の緊急事態宣言が発令し、変異株も広がってきています（現時点では8月に大阪でも発令される予定）。
- ◆ このような社会的危機下において閉鎖感のある状態が長引くなかでは、みなさんの不安やストレスも強まっている事とおもいます。これらについては、具体的な対応方法があればよいのですが、なかなか難しいというのも現状です。
- ◆ 今回のワークの目的は、このような状況で「今できること」として、まず皆さんのつぶやきひろいからはじめ、**①自分と周囲の思いの違いや悩みの共有の場づくり**、**②表層的理解ではない「気づき」の創出**、そして**③心理的支援や今後の教育的対応**について考える機会を作ることにあります。
- ◆ 今回のワークは、学生有志が一緒になって進めていますが、建築学部としても全学年を対象として実施することになりました。このワークを契機に、皆さんのコロナ対策が、今一步リアリティと責任を持った行動に繋がってくれることを期待しています。



# ワーク

## に至る経緯

- ◆ このワークを始めたきっかけは、学部で濃厚接触者・陽性者がでたことでした。ゼミ内でヒアリングをしたところ、いくつかの？を感じました。そのつぶやきのなかには、学生自身や家庭などにも事情があることがわかりましたが、偏った情報を主な判断理由にしている可能性、そして「自己責任」や「個人や大学の責任」、「危機感がない人の責任」など『責任』という言葉の使い方が気になりました。そこで、ゼミでもう少し掘り下げるために下記の3種類のワークショップ（Pre-Work）を実施しました。
- ◆ Pre-Work 1 のアイスブレイキング・ワークでは、自分の事をはじめ友達から聞いたことも含めて、多くの学生の「思い・つぶやき」を拾いあげてもらいました。次に、Pre-Work 2 でポジションチェンジ・ワークでは、得られたコメントを13の意識タイプに分けて相互に役割を入れ替えて意見交換しました。Pre-Work 3 ではインフォメーション・アナリシスを行い、災害時に人が陥る心理的現象や差別意識等について調べました。
- ◆ そして今回は学部として5回のWorkを実施しました。Work 3 ではワークショップ型アンケートとして、ワークについて考え、自分たちの経験をもとに同じような悩みを抱えている皆さんのつぶやきや悩みを出しやすくし、次の行動を考えるきっかけにするアンケート項目づくりにも取り組みました。

# ワークの 概要と流れ

4/26  
~  
5/6

Pre-Work 1 : アイスブレイキング・ワーク  
Pre-Work 2 : ポジションチェンジ・ワーク  
Pre-Work 3 : インフォメーション・アナリシス

- 学生の「思い・つぶやき」の拾いあげ
- 13の意識タイプにおいて相互に役割を入替えて意見交換
- 災害時に人が陥る心理的現象『災害認知バイアス』や差別意識の調査

6/2~7

**Work 1 アンケート①【新型コロナに関する意識調査】**

6/11~25

**Work 2 アンケート①中間報告**

- 対象 : 1・4年生 (各ゼミにて実施)

- 各ゼミにてアンケート①の結果をもとに意見交換 (ゼミワーク) + コロナ対策指導

6/20~25

**Work 1 アンケート① 対象 : 2・3年生 (講義にて実施)**

**Work 2 アンケート結果の中間報告 + 自校学習にて指導**

7/3

**Work 3**

ワークショップ型  
アンケート項目作成

7/10~16

**Work 4 アンケート②【ワークの振り返り】**

- Work 1・2の結果報告 + 基礎ゼミにて相談
- 学生アンケート② + 教員アンケートの実施

Informed Decision Making

ワーク結果まとめ (報告書作成) ・発信

→ 対応検討へ

**Work 5** 現代都市計画 (講義) にて対策ワーク 7/30

**Work 6** 学生団体とWEB 交流会検討 (予定)

- 項目
- 【1】新型コロナ禍の深刻度
  - 【2】新型コロナ情報入手先
  - 【3】13の意識タイプ別意向
  - 【4】大学情報の認知度
  - 【5】感染状況について
  - 【6】自由記述

- 項目
- 【1】アンケート回答の同意度
  - 【2】危機感の変化について
  - 【3】大学情報の認知度変化
  - 【4】意向項目への同意度
  - 【5】コロナ禍環境のニーズ
  - 【6】コロナ禍後のテーマについて
  - 【7】本ワークの成果について
  - 【8】自由記述



## 報告にあたって

### 担当者からのメッセージ

#### ワーク・アンケートの設定について

- 今回のように多くの学生を対象に本ワークの目的を達するには、個別ワークショップでは限界がありました。また、自粛疲れのなかで「指導」・「要請」・「指示」を受けるだけでは不安や悩みも解消されず、実質的な対応につながらないのではないかという思いから、今回は**アンケートによるアクティブラーニング方式**を取り入れました。一連のワークを通して、**皆さんの「不安や悩み」の共有、「気づき」の創出、そして具体的な「行動」が生まれるきっかけとなることを期待**したものです。その意味では、アンケート形式をとっていますが、学術的な調査ではありませんので、なるべく答える人が悩みを共有し、同意・違いなどを考えるきっかけを生む設問になるように工夫しました。
- **設問設定にあたっては、学生からの「つぶやき」をそのまま使いました。**とくに、アンケート①の「**13の意向タイプ**」では、複数の内容が混在していたり、定義が不明瞭であったり、途中で意味が変わるなど一般的なアンケートとしては適切でない項目もありますが（ダブルバーレルなどと呼ばれています）、今起こっているリアルな悩みや不安、思いが吐露されていることから切り離すことができないものも多く、**その言葉自体がいまの皆さんが抱えた課題抽出や思いをつなぐきっかけになるのではないかと考えて、そのまま設定**しています。
- また、アンケート②の「**ワーク3による今後に向けた整理**」項目に関しても同様ですが、特筆できることは、**感染や濃厚接触を経験した学生が中心になって、皆さんにどうすれば伝わるかについて考えるワークが実現**したことだと思います。**その立場になって初めて感じたこと、後悔、期待も含めて彼らの皆さんへのメッセージ**でもあります。
- 私にとっても、学生のみなさんとのワークで多くの気づきがありました。ありがとうございました。なお、今回のワークに際し、建築学部の教員をはじめ多くの方にご協力いただき感謝いたします。とくに“オール近大”新型コロナウイルス感染症対策事業でご活躍の社会連携推進センターの安田直史教授と人権問題研究所の熊本理抄教授には、今回の結果や膨大な自由記述まで手寧に見ていただき、多くの事を学ばせていただきましたことをご報告し、感謝いたします。



## アンケート回収状況

- ▶ アンケート①、②ともに8割という高い回収率でした。みなさんご協力ありがとうございました。
- ▶ アンケート①で4年生の回答数が少ないことを懸念した意見もありましたので、アンケート②では、「建築総合演習」で実施したところ、8割近い回収が得られました。
- ▶ また、教員アンケートでは24名の先生に答えていただくことができました。
- ▶ なお、今回の分析では、回答者を有効回答母数として集計しています。

### Work 1

■実施日	1年生	〈基礎ゼミにて実施〉	6月 2日～ 7日
	2年生	〈自校学習にて実施〉	6月20日～23日
	3年生	〈現代都市計画にて実施〉	6月23日～25日
	4年生	〈各ゼミナールにて実施〉	6月 2日～23日

■手法 Googleフォームによるアンケート方式

#### ■調査対象者

1年生	285 人	(全 301人)	回収率 94.7%
2年生	262 人	(全 296人)	回収率 88.5%
3年生	202 人	(全 274人)	回収率 73.7%
4年生	173 人	(全 298人)	回収率 58.1%
(大学院生)	(12人)	参考値 (12人)	回収率 -
合計	934 人	(全 1,169人)	回収率 79.9%

### Work 4

■実施日	1年生	〈基礎ゼミにて実施〉	7月10日～16日
	2年生	〈自校学習にて実施〉	
	3年生	〈現代都市計画にて実施〉	
	4年生	〈建築総合演習にて実施〉	

■手法 Googleフォームによるアンケート方式

#### ■調査対象者

1年生	266 人	(全 301人)	回収率 88.4%
2年生	233 人	(全 296人)	回収率 78.7%
3年生	207 人	(全 274人)	回収率 75.5%
4年生	236 人	(全 298人)	回収率 79.2%
学生計	942 人	(全 1,169人)	回収率 80.6%
教員	24 人	(全 34人)	回収率 70.6%

## 概要：要点まとめ 1/2

- 今回のワークの目的は、COVID-19禍での学生生活における不安や課題があるなかで、私たちが「今できること」として、学生をつぶやきひろいからはじめ、①自分と周囲の思いの違いや悩みの共有の場づくり、②表層的理解ではない「気づき」の創出、そして③心理的支援や今後の教育的対応について考える機会を作ることを実施した（アンケートによるアクティブラーニング方式を取り入れた）。
- このワークは、学生有志が参画しながら学部全体で実施した。全学年で8割の回答があり、400を超えるコメントが寄せられ、学生のこの環境下での関心の高さが表れている。
- 今回のワークによって、「みんなの思いを聞いたので不安が解消した。」「自分の立ち位置（他人との距離感）を知る契機となった。」「今後の行動につなげたいと思った。」という回答が多く、ワークの意義は一定果たされたといえる。また、他人の話や状況を聞くこと（立場をイメージすること）によって「気づき」が生まれ、とくに「知らないうちに感染する可能性があるウイルス特性を知って行動したい」という認識が強まったと考えられる。
- 一方、多くを占める側にいるから良い、少ないから悪いというものでもなく、逆に少ない意見や判断を保留するもの、意見を言いにくいもの、自由記述の内容も注意深く見る必要がある。
- 感染に対して強い危機感を持っている学生と、そうでない学生が同様に存在し、行動要素として経験やつながりで意識に差がある。また、自粛や防疫意識が高い人でも、他者に対しては寛容（尊重？）する傾向もみられた。

### 【アンケート回答まとめ】

1. 感染者が身近にいるひとが、全体の約半数（4年生で6割）
2. COVID-19の情報入手先は、新聞やTVのニュースが7割、SNSは15.6%
3. 大学から発信されている情報について、「知っている」・「聞いたことがある」が半数でしたが、今回のワークをとおして、「知っている」（今回の契機に内容まで見たを含む）が66.2%と3割増加しました。
4. COVID-19については、約7割が深刻に受け止め、危機意識を持っていたが、本ワークによって全体の9割に増え、約3割が改めて高まったと答えている。
5. あなたと他の人の思いについて同じ傾向だと思ったものが8割。「どちらともいえない」は17.2%で学年が上がるほど増え、4年生で25.4%を占める。
6. 学生のインタビューをもとに仮設定した『13の意識タイプ』が示すメッセージ【『自己責任』って？／危機意識と気づき・逡巡する思い／経験して変わる危機感／自粛の長期化によるフラストレーションと対案希求／「守るべきもの」とは？誰が決めるのか？／社会対策／答えが出ない苛立ち】について、**全体の約6～7割が同意できている**。この項目で示された多くの事象を読み取ることで、自分と他人との意識の違いや状況を受け止める「気づき」のきっかけになったといえる。
7. **これからの行動「10の項目」について 全学年で 87.4%が同意（9割超えは7項目）** Top3は、“いろんな環境下にある学生の状況を踏まえて柔軟に対応してほしい”、“十分に情報を得たうえで自分自身で決めることが重要”、“個人の状況を知らずに「同調圧力」をかけたり差別をしないようにしたい。”。教員アンケートでもほぼすべての項目で同意、“いろんな環境下にある学生の状況を踏まえて柔軟に対応したいものだ”も9割近くを占めている。
8. **今欲しいもの・あったらよいものについて、半数がCOVID-19環境下での情報交換・交流を、3割超が先生との学びの場を求めている。**
9. **感染収束後に注目するテーマについて、約半数が“テレワークなど新しい生活スタイルを受け止めるデザインや技術”、“感染症対策を契機とした建物のデザインや計画”に興味をもっている。**
10. **400超のコメントは、各学生の悩み・不安・不信・期待が表出している。そのコメントに触れ（6と同様に）他人との意識の違いや状況を受け止める「気づき」のきっかけになっている。**



# 概要：要点まとめ 2/2

- 「自粛」の必要性はわかるものの、自分や家族の生活環境が厳しいものもあり、学生のストレスは大きくなっている。学生時代をこんな形で過ごさなければならぬ状況について、誰にぶつけたらよいかわからないフラストレーション、先の見えない「自粛」（の長期化）しか示さない社会に対する違和感、とくに政府や行政自体が自粛していないという事態に対する怒り、緊急事態宣言解除と自粛要請の齟齬などへの違和感も吐露された。
- 大学の授業等についても多くの意見が集まった。対面授業の可否についても学生による思いに様々な違いがある。その他、授業料の減免や給付などの生活支援をはじめ、登下校時の対策などの心配や試験方法など柔軟な対応を求めるものが多い。
- 情報については、新聞やTVニュースが多いものの、WEBから入手する（溢れる）様々な情報も含めて、情報そのものに不信感を持つ意見や、ある特定情報に傾倒するものもみられた。とくに、ワクチン接種については悩み事として表出している。
- 本ワークでは「自己責任」とはなにかが議論された。多くの学生がこの言葉を「自分勝手な行動」として捉えているが、「自分で責任がとれれば問題がない」という意識と「責任など取れないし、だれの責任か問えない」という文脈でも話されている。社会的圧力も影響している現状では、「誰が」「誰に」も含めて判断は難しく、簡単に責任がとれない、わからない状況では、一概に責任という言葉は使いにくいことが分かった。
- 今回、この「責任」のとらえ方と同時に、「災害認知バイアス」、「同調圧力」など重要なキーワードが出た。多くが、このような非常時・災害時におこる現象をよく把握し、一方的な決めつけで（相手の状況を知らずに）忌避や差別につながらないように配慮すべきである。

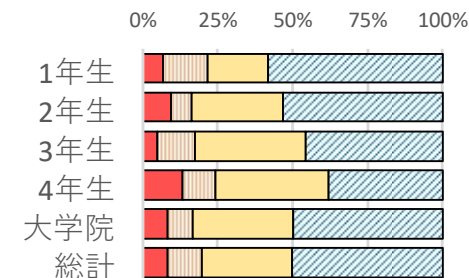
- 目まぐるしく状況が変化している現状では、玉石混交の情報から、いかに正確な「情報」に基づいて（得やすい環境下で）意思決定して自ら行動することが大切である。このワークをきっかけに、上からの力、周囲の影響によって行動させられるのではなく、また、やらない（やれない）理由を考えるのではなく、自分事として何ができるかについて考えるきっかけになる事を期待している。今回得られたつづきや課題を今後どのように展開するかが重要である。
- ワークの意見に「やっても意味がない」「何もできない・してくれない」などの対案（行動）なき批判もあるが、何が正しいかわからない状況では、やることに「意味がない」ことなどなく、いかに自分のものにしていくかが重要である。違いを知ることやそれを受け止める力、分かろうとする力が必要である。そして、変わるはずがないと思っていたことが行動によって周囲が少し変化するかもしれない。「思考停止」しない気持ちが重要である。
- この困難をどう乗り越えたかは、将来必ず大きな糧になると考える。ポストCOVID-19『ニューノーマル』の時代は、まだ誰も経験したことがないチャレンジングな社会であることから、何を残すのか、何が変わるのかなど、各々が当事者であり、専門家となれる時代だともいえる。
- ワクチン接種も始まり、現在の閉塞的な事態を変える“ゲームチェンジャー”として期待されている。大学では、いち早くその場をつくり、学習環境を整えるべく様々な対応を進めているところだが、いろいろな点で学生の思いとのギャップが生じているかのようにもみえる。
- 今いえることは、大学、教員、学生（学生同士を含め）の間で「相互不信」が生じないように情報を丁寧に共有し、実感や信頼が伴う関係づくりが必須である。不正や不誠実な行動で信頼を失うことがないように「縮尺（立場や環境）を超えた想像力」を発揮し、互いにできることから始めることがこの困難を乗り越える特效薬であると信じている。

# 1. 感染者が身近にいるひとが、全体の約半数（4年生で6割）

COVID-19 に感染または濃厚接触者等への検査について聞いたところ、“自分が感染または検査を受けた”人が全体の8.4%（78人）、“家族や親族・身近な友人がかかった”という人が11.3%（106人）、“知人友人にいたる”が30.0%（280人）でした。少しでも感染に関係している人が全体の半数もいます。また、学年が上がるにつれてその数も増える傾向があり、1年生は41.8%（119人）、4年生の関係者が61.8%（107人）と20ポイントも多くなっています。[アンケート①]

表1：学年別感染関係の状況

	①				②				③				④			
	①	②	③	④	総計	①	②	③	④	総計	①	②	③	④	総計	
1年生	19	43	57	166	285	6.7	15.1	20.0	58.2	285	6.7	15.1	20.0	58.2	285	
2年生	25	18	79	140	262	9.5	6.9	30.2	53.4	262	9.5	6.9	30.2	53.4	262	
3年生	10	25	75	92	202	5.0	12.4	37.1	45.5	202	5.0	12.4	37.1	45.5	202	
4年生	23	19	65	66	173	13.3	11.0	37.6	38.2	173	13.3	11.0	37.6	38.2	173	
大学院	1	1	4	6	12	8.3	8.3	33.3	50.0	12	8.3	8.3	33.3	50.0	12	
総計	78	106	280	470	934	8.4	11.3	30.0	50.3	934	8.4	11.3	30.0	50.3	934	



# 2. COVID-19の情報入手先は、「新聞やTVのニュース」が7割、SNSは15.6%

COVID-19 に関する情報は、7割が“新聞やTVのニュース”で入手しており、次いでSNSが情報源（15.6%）となっています。家庭内での対策・情報共有は学年が低いほうが比較的話されているようです。[アンケート①]

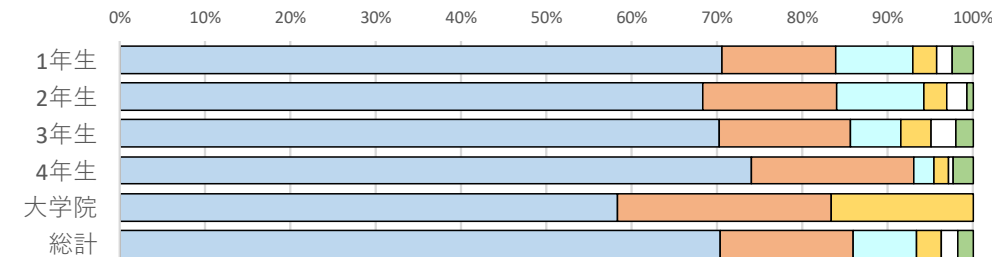
**1** 新聞やテレビのニュースや情報番組  
**4** 大学のコロナ関係の情報発信

**2** YOUTUBEやLINEなどのSNS経由の情報  
**5** 友人知人からの口コミ情報

**3** 家庭内での対策・情報共有  
**6** 新型コロナ禍に対応している介護・医療・行政等従事者から直接

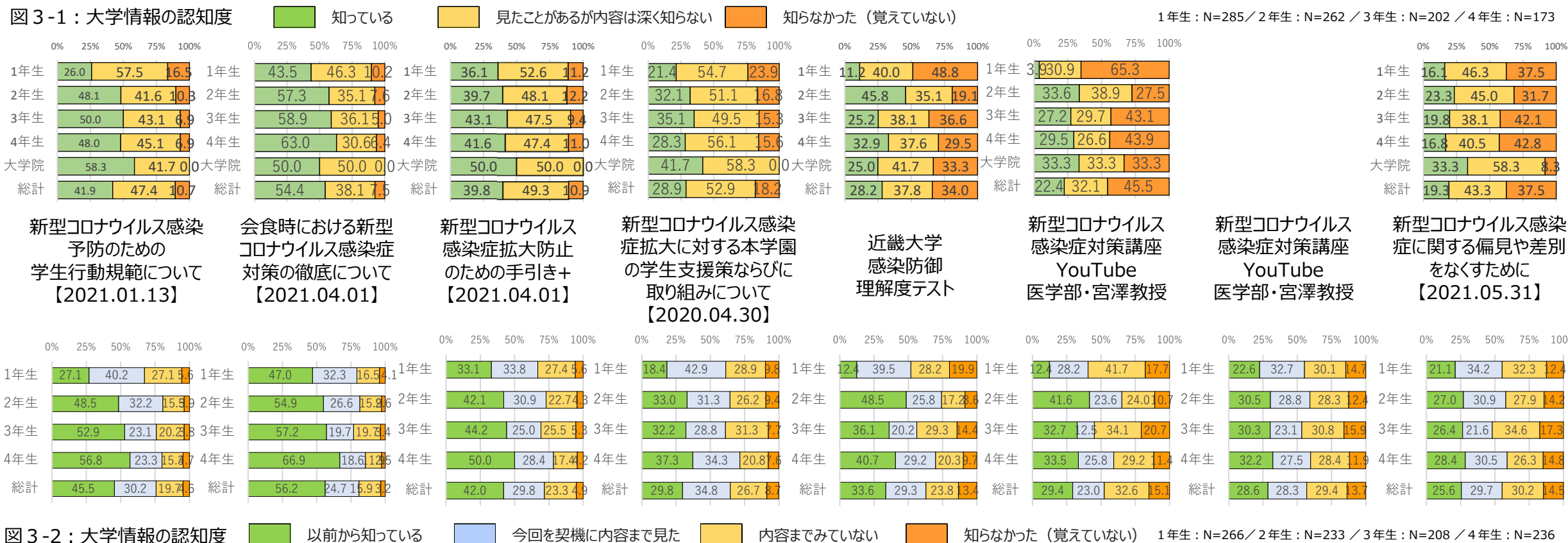
表2：学年別情報入手場所

	①						②						③						④					
	1	2	3	4	5	6	総計	1	2	3	4	5	6	総計	1	2	3	4	5	6	総計			
1年生	201	38	26	8	5	7	285	70.5	13.3	9.1	2.8	1.8	2.5	285	70.5	13.3	9.1	2.8	1.8	2.5	285			
2年生	179	41	27	7	6	2	262	68.3	15.6	10.3	2.7	2.3	0.8	262	68.3	15.6	10.3	2.7	2.3	0.8	262			
3年生	142	31	12	7	6	4	202	70.3	15.3	5.9	3.5	3.0	2.0	202	70.3	15.3	5.9	3.5	3.0	2.0	202			
4年生	128	33	4	3	1	4	173	74.0	19.1	2.3	1.7	0.6	2.3	173	74.0	19.1	2.3	1.7	0.6	2.3	173			
大学院	7	3		2			12	58.3	25.0	0.0	16.7	0.0	0.0	12	58.3	25.0	0.0	16.7	0.0	0.0	12			
総計	657	146	69	27	18	17	934	70.3	15.6	7.4	2.9	1.9	1.8	934	70.3	15.6	7.4	2.9	1.9	1.8	934			



### 3. 大学から発信されている情報について、「知っている」・「聞いたことがある」が半数。

アンケート①では、大学方針等について約4～5割が知っていると答えていますが、大学による学生支援制度などは「聞いたことがある程度」が半数、理解度テストや医学部のYouTube対策講座、偏見差別に関する発信については知らない人が多いという結果がでました。また、全体的に学年が上がるとともに認知度も高まっていますが、1年生の認知度が低い状況がありました [アンケート①]。今回のワークをとおして、全体で「知っている」（今回の契機に内容まで見たを含む）が66.2%と3割増加し、1年生の認知度も4年生に次いで高くなりました。 [アンケート②]



#### 4. COVID-19については、約7割が深刻に受け止め、危機意識を持っていましたが 今回のワークによって全体の9割に増え、約3割が改めて危機意識が高まったと答えています。

COVID-19禍に関する深刻度とワーク後の危機意識の変化をみると、アンケート①では、77.2%が深刻であると認識し（4年生が84.4%と最も高い）、学年が上がるにつれて深刻度の強さは減少する傾向があります。〔アンケート①〕

また、ワーク後のアンケート②では、“もともと危機意識がある”と答えた66.1%に加え、31.2%の人が今回のワークを通じて、“危機意識がより強まった。”、“今回持つことができた”と答えており、このワークによって危機感や関心が高まったといえます。〔アンケート②〕

#### 5. アンケートおよびワーク結果に関して、あなたの思いと他の人の思いについて同じ傾向だと思った人は8割を超えています。「どちらともいえない」は17.2%ですが学年が上がるほど増え、4年生では25.4%を占めています。

表5：ワークの意向に関する同意傾向

	全学年		1年生		2年生		3年生		4年生	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
多くの項目について同じ傾向だった	219	23.2	71	26.7	54	23.2	43	20.8	51	21.6
どちらかといえば同じ傾向だった	541	57.4	161	60.5	139	59.7	121	58.5	120	50.8
どちらともいえない	162	17.2	30	11.3	36	15.5	36	17.4	60	25.4
どちらかといえば自分とは傾向が違った	18	1.9	4	1.5	3	1.3	6	2.9	5	2.1
多くの項目で自分と傾向が違った	2	0.2	0	0.0	1	0.4	1	0.5	0	0.0
計	942	100	266	100	233	100	207	100	236	100

表4-1：学年別COVID-19の深刻度

	全学年		1年生		2年生		3年生		4年生		(参考)大学院	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
かなり深刻に受け止めている	325	34.8	113	39.6	90	34.4	61	30.2	58	33.5	3	25.0
↑ ↓	396	42.4	112	39.3	103	39.3	88	43.6	88	50.9	5	41.7
	165	17.7	46	16.1	56	21.4	41	20.3	19	11.0	3	25.0
全く深刻に受け止めていない	34	3.6	11	3.9	7	2.7	7	3.5	8	4.6	1	8.3
14	1.5	3	1.1	6	2.3	5	2.5	0	0.0	0	0.0	
計	934	100	285	100	262	100	202	100	173	100	12	100

表4-2：ワーク後の危機意識の変化

	全学年		1年生		2年生		3年生		4年生	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
もともとあったが、強まった	238	25.3	84	31.6	54	23.2	44	21.3	56	23.7
もともとあったし今も変わらない	623	66.1	163	61.3	162	69.5	141	68.1	157	66.5
あまりなかったが今回で持つことができた	56	5.9	13	4.9	12	5.2	13	6.3	18	7.6
なかったし、いまもない	14	1.5	2	0.8	2	0.9	6	2.9	4	1.7
危機意識・危機感が弱まった	11	1.2	4	1.5	3	1.3	3	1.4	1	0.4
計	942	100	266	100	233	100	207	100	236	100



## 6. ① 学生のインタビューをもとに仮設定した『13の意識タイプ』について

### ワーク意見から（抜粋）

### 『自己責任』って？

Type 1 自分は下宿生なので、もし何かあっても自分自身が病気に気がかかってしんどい思いをするのは自己責任だと承知している。他の人には迷惑をかけないので大きな問題ではないと感じる。

Type 2 緊急事態宣言も解除されたし、学生などいろんな人が普通に動いているのを見ると自分たちだけが我慢することはないと思う。大学から自粛勧告が出ているが、友達有志で飲食などにいくのであれば、大学にも迷惑はかけないので、自己責任の範囲で大丈夫だとおもう。

Type 4 ニュースでは、若者は罹りにくく、インフルエンザ程度の病気で、世界的にみると本当は大きな問題ではないと言っている専門家も多い。身近でかかったという人は多くないし、かかった人もすぐに完治している印象。

「自己責任」という言葉は、ヒアリングの際にとてもよく出てきた言葉でした。それは、「下宿で不安やストレスがかなりたまっている。ずっと一人だし、誰にもうつさないと思う。」「自分の責任範囲の行動なので、大学や周りには迷惑をかけないはず。」「単に有志の集まりや行動まで問題になるとは思わなかった。」というニュアンスで話されていました。このコロナ禍と「責任」について考えるために、まず、みんなはどう感じるのかを聞こうということになりました。

■結果：どちらの意見も約6割が「そう思わない」としていますが、16～17%程度は「自己責任」で問題ないと認識しているようです。

### 危機意識と気づかい／逡巡する思い

Type 5 私の家族には高齢の祖父母がおり、集まりの場でうつって自分が感染させてしまったらと思うと怖いので、決して行かないようにしている。ただ、下宿生など人に会わずに自己責任でうけ止めることができる人については、このようなしんどい状況下でもあるので、自由にしてもよいと思う。

Type 6 自分の家族が基礎疾患を持っているので、このような場所にはいかない。行く人は自由であるが、もしどこかで知らない間に自分がうつされて家族にもうつしたらとおもうと誰に責任を取ってもらうのか判断しにくい。

これらは、身近に感染を強く回避したい（しなければならぬ）環境にある人のつづやきです。個人的に注意していても、意識しない人から受ける家族等への影響を心配するメッセージでもあります。この言葉には、ストレスや不安をかかえているみんなの気持ちもわかるので強くいえないでも自分や家族が心配だ。という逡巡が表れています。

■結果：Type 5では半数が同意できないとし、約2割程度が理解を示しています。Type 6では、約7割が同意していますが、約1割は同意しない状況でした。

- 個人的に非常に注意してコロナ予防、自粛をしている中で、全く意識せず行動する人たちが少しでもいるということが理解できない。「自己責任=自由な行動」で収まらない事態であることをわかって欲しいと書いてあったが本当にそうだと思う。
- 自己責任のつもりで行動した結果病床を圧迫し医療崩壊に繋がったり、自覚症状がないまま感染を広げたりするかもしれないことをもっと重く受け止めてほしいと感じた。
- 「自分は大丈夫だから」と考えている人はもう一度考え直して欲しいです。隣の席に座っている人のおじいちゃんやおばあちゃんにうつしたときのことも考えて、意識を変えて欲しいです。意識を変えるだけで、ずいぶんコロナの感染の広がりも抑えられるんじゃないかなと思います。
- 4回生のアンケート回答者の割合の低さについては正直驚きました。コロナ感染拡大が経って1年、現状はあまり良くなっておらず去年の3月と比較すると、この環境に慣れてしまったのか人の警戒耐性の意識は緩くなっていると感じます。
- 自粛しないといけない、外出をするのは良くない、自分だけの問題じゃないと分かっているけど、実際に自分の行動を振り返ってみると言動が矛盾している人は多いと思う。
- 個人個人の意見があっても、経済的側面でも社会的側面でもどこまで許容するかが違う中で歯車がかみ合わないのは仕方ないことだと感じた。すべての行動に責任が伴うため、生きにくさを感じる人は多いだろうし、少しでも多くの選択肢がそれを緩和してくれる気がした。
- 個人的には、正直あまりコロナを問題視できていない。身近にコロナに感染した人はいないし、何かテレビの中の遠い出来事のように感じる。緊急事態宣言もやりすぎのように感じる。コロナに罹っても自己責任の範囲だなんて思わない。



## 6. ② 学生のインタビューをもとに仮設定した『13の意識タイプ』について

### 経験して変わる危機感

<p>Type 7 家族に小さな子どもがおり、親子とも病院に通っているが、コロナ対応で手術も延期されることもありそう。もし自分が病気になったときに対応してくれずに悪化したり亡くなったりしたら誰に責任を取ってもらえるのか。医療崩壊を身近に感じていない人に言いたい。</p>	<p>実際に家族や周りに影響が出たことや、そのような状況がある友人の話を聞いたり、実際に医療ひっ迫している報道等をみたことで、これまでのとらえ方が変わったこと、「自己責任」のもとで結果として医療破綻によって守られたはずの命が危険にさらされる危機感を伝えるために発信してはどうかということから設定した項目です。 項目設定時には、経験していないひとは「わからない」という答えになることや、強い言葉を使うことで「反発」を生むのではないかと懸念されましたが、自分の思いをそのまま訴えることで伝わることもある。という思いで設定しました。</p>
<p>Type 11 自分がかかるかどうかは自己責任なので人に迷惑をかけないという人は、のちの最悪のケースをイメージできていない。病院や病床の緊急事態やそれにかかわる従事者の苦労をはじめ受けるべき必要のあるそのほかの患者への影響など、独りよがりな想像力が乏しいと思う。</p>	<p>■結果：7割以上が同意していますが、約1割は同意しない状況で、「どちらともいえないわからない」を入れると3割強が同意には至っていないようです。</p>
<p>Type 10 自分が陽性者になり、家族にもうつしてしまった。治療時のしんどさと不安は言葉に出せないほどである。なっからでは遅い。なにより家族にうつしてしまったことを後悔している。もし家族になにかあればどうしよう。</p>	<p>これまであまり危機感を持ってなかったが、自分がかかった、またはそのことで家族に感染させてしまった（かもしれない）事態を受けて発せられた項目です。多くの学生が、「もっと早く気付くべきであった。みんなにも伝えたい。」と願う項目です。 ■結果：8割が理解を示しており、もっとも同意度が高い項目でした。</p>

### ワーク意見から

- 大学で新しくできた友達に遊びに行かないかと誘われました。その子は一人暮らしですが、わたしは家族と暮らしているのだから自己責任などとは言われていません。一人暮らしだからと言って好き勝手外出したとしても自分が周りにウイルスを振りまいているかもしれないという意識を一人一人が持つべきと考えました。
- 私の弟や同年代の知人もコロナに感染しましたが、その中には味覚障害などの後遺症が残っている人もいます。若者はコロナにかかっても大丈夫、また自己責任の範疇であれば迷惑はかからないと考えている人には、考えを改めてほしいと思いました。
- 数日まで元気だった人が急に亡くなるという状況を身近な人で経験し、これまで他人事だと自粛はやりすぎなのではないかと考えていた自分の考えが一変しました。数日前に家族が40度まで発熱した時、2件の病院（一つはかかりつけ病院）に診察を断られました。4診察すらしてあげることができず、ただ見ているだけなのかと思ったらゾッとします。
- 現在の医療崩壊は想像以上に大変なものになっているのだと実感しました。感染してからでは遅い、今の自粛は自分や家族を守るために必要なものだと考えます。
- 自分自身、また家族の1人が感染した経験を経て私が思うことは新型コロナウイルスに感染対策に焦点を当てすぎるのではなく、感染した後の対応を政府や自分たちで考えなければならないと思う。
- 昨年の緊急事態宣言が出された時は留学中だった兄弟が帰国してくるということもあり、2週間家族バラバラに自粛するなど危機感が一番強かったが、規制が緩和されるにつれて危機感が薄れていた。しかし、身近に感染した人が出たことにより、今まで少し他人事のように感じていたコロナが一気に身近に感じ危機感が強まった。

## 6. ③ 学生のインタビューをもとに仮設定した『13の意識タイプ』について

### 自粛の長期化によるフラストレーションと対案希求／「守るべきもの」とは？誰が決めるのか？

<p>Type 3 今のように自粛が長期化するなかで、自分の兄弟姉妹は卒業旅行にも行けなかった。大切な学園生活を享受できなかったことについて、どうしようもないではなく、中止するだけでなく、もっとできることを考えてほしい。感染防止対策をきちんとすればもっといろんな方法があるはず自粛だけ強制させるのではなく別の手だても一緒に提示してほしい。</p>	
<p>Type 8 アルバイト先が休業（閉店）することになりそう。コロナ対策を十分して頑張ってきたにも関わらず一律に休業要請させることには納得できない。結局従業員も私も解雇されては生活が苦しくなる。自粛の必要性はわかるが、代わる手だても同時に示してほしい。</p>	
<p>Type 9 自分の家族は飲食店を営んでいるがコロナで大打撃を受けている。でも両親は、お客さんや常連さんについてはいけな、クラスターを発生させてはいけなと思ってやむなく休業している。なにが原因になるのかわからないなかではできないという判断だと思う。</p>	<p>この長期にわたる「自粛疲れ」のなかで、自分や家族の生活や日常生活への負担がのしかかってきている状況にあり、先が見えない、どうしたらよいかわからない不安、フラストレーションが表れた項目。「できる事」をもっと示してほしいという社会への強い願いがこもった項目です。とくに、生活が懸かっている学生にとっては、家庭の心配も含んでより深刻な状況もみられました。手立てもないまま、反発する相手がいなまま「自粛させられている」ことへの逡巡を感じ取れる項目です。</p> <p>■結果：7割を超えて同意。1割程度の人には理解できないとしています。</p> <p>* なお、ヒアリング当初は【事象A】：「社会は問題を改善してくれない」、「店がつぶれてしまうし、自分の生活も成り立たない」、「感染しても自己責任（責任は他人や大学にない）」「議員が自粛していないし、オリンピックもするらしい」ので、【行為B】：「（飲食などの集まりに）行ってよいと判断できる」、「自粛しなくてよい」という文脈で話されることがありました（TYPE1・2・4も含む）。ワークでは、AはBの理由にはならないのでは？という議論になりました。とくに「誰もがいつどこで感染するかわからない、自覚なき感染拡大傾向のある新型コロナがまだ広がっている」現状において「大丈夫な環境」でなければBを正当化する理由にならないのではないかという議論でした。ただし、大丈夫ってどんな環境？、正当化？も含めて答えはできませんでした。</p>

### 社会対策／答えが出ない苛立ち

<p>Type 12 コロナ対策の必要性は理解するが、それに伴う社会経済や暮らし、自殺者、子どもの教育、そして大学に行けない問題など社会経済活動のダメージが大きくなりすぎており、コロナ対策に偏りすぎている。同時に社会経済対策も十分行うべきだと思う。</p>	
<p>Type 13 社会経済活動のダメージが大きくなりすぎているが、いまはコロナ対策に集中すべきで、感染が落ち着き次第すぐにその他の対策ができるように準備を整えておくことが重要だと思う。</p>	<p>現在のコロナ対策に関して「偏在化している。」という思いと、「今はコロナ対策に注力すべきだ。」という相反する質問で、社会的にも揺れ動いているテーマ。個々の行動にも影響するものの、明確な答えは示されていません。</p> <p>■結果：若干、社会経済対策への移行を求めている人が多いようです。しかし、2項目のどちらにも理解を示す人や選べない人も多く、矛盾する悩みが表出していると考えられます。</p>

## 6. ④ 学生のインタビューをもとに仮設定した『13の意識タイプ』について

### 全体の約6～7割前後が同じような意見（同意）

### 1割が不同意、2割が「どちらともいえない・わからない」

同意の傾向について、全体の約6～7割が同じような意見であることが分かりました。タイプ10が8割を超え、タイプ8・11で7割以上が同意傾向にあります。一方、1割には満たないもののそれらとは反対の意向を持つ人もおり、タイプ4・5で2割の人が、タイプ1・2・13では1割前後があります。その他、「どちらともいえない」は、タイプ13で3割、タイプ2・4・5・7・12で4分の1以上が保留しています。逡巡している場合や項目について一部同意で一部不同意のものもあったのではないかと思います。 [アンケート①]

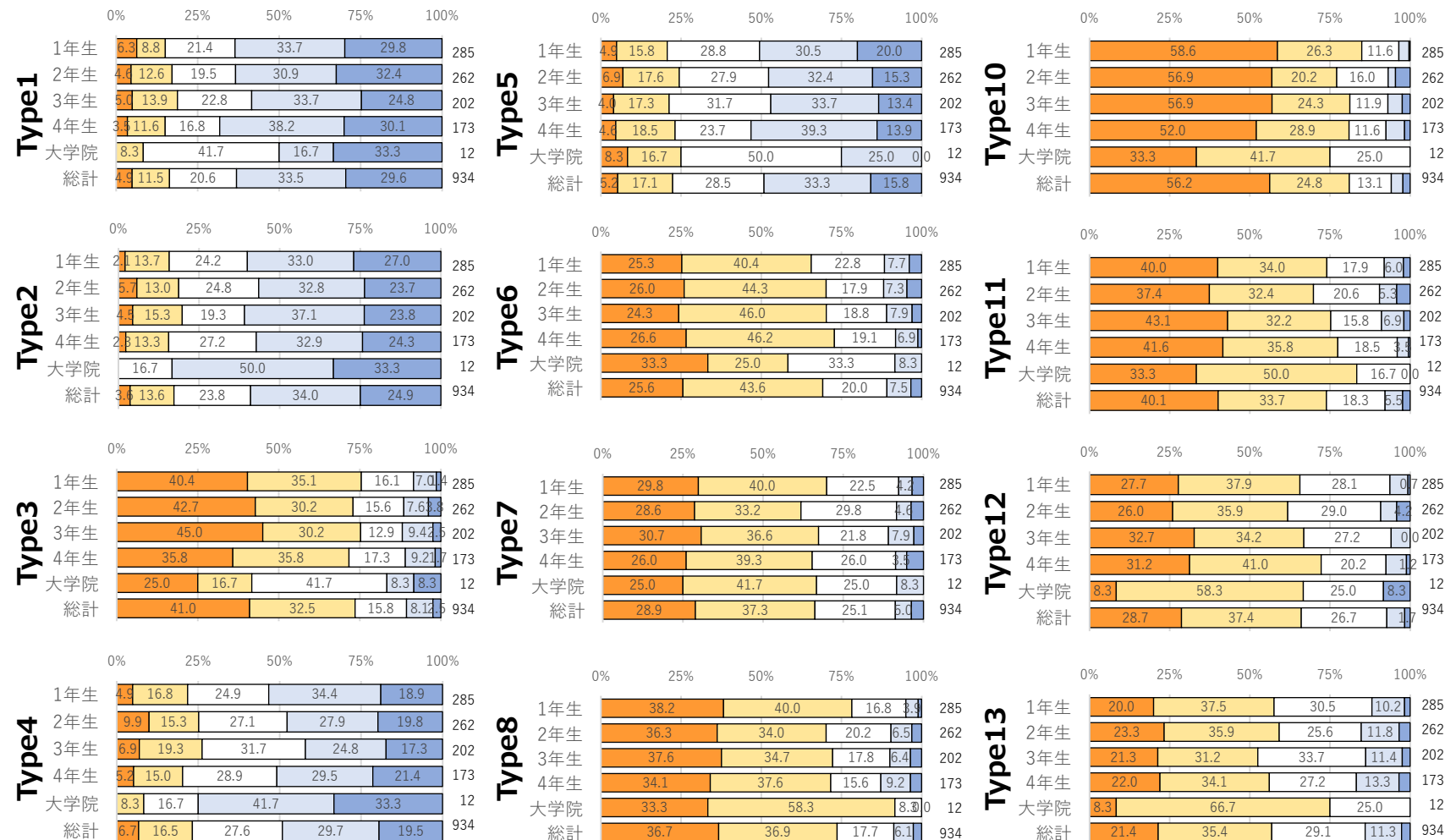


図6：13の意識タイプの同意度



# ところで 『災害心理バイアス』 って何？

このような災害やカストロフィ時に  
人が陥りやすい心理的現象

- 「災害心理バイアス」とは、正常性バイアス、楽観主義バイアス、確証バイアス、集団同調性バイアスなど、人が災害などの大きなストレスを受けたときに発現する心理的な行為・行動をいいます。それは、「身を守る」本能的な行為でもありますが、ストレスに対してつぶれないようにすることの大切さと、実際起っている事実への対応の間にギャップが生じるといわれています。まずは「人は、大きなストレスを受けたときにこのような心理状態になる可能性がある。」という事実を知っておくことが重要です。\* 東北大震災の津波では、この心理バイアスによって命を落とした人が多くいたといわれています
- 災害時には弱い立場の人の人権がおろそかになりがちだといわれています。とくに被災地の災害と人権の問題は今なお課題になっているようです。一般的に「非常時」には、「社会的管理や監視」、「同調圧力」が強まるといわれています。今回のアンケートについても、その回答には様々な思いや理由があることを知ったうえで、レッテル貼りやスケープゴートがないように注視したいですね。そして、正確な情報を共有しながら信頼関係を構築し、一緒に乗り越えていくことが重要だと思っています。とくに今後は、ワクチン接種の有無やコロナ陽性者への対応をはじめ、災害と人権についての丁寧な取組みが求められると考えています。ここでも「縮尺を超えた想像力」が必要です。

正常性バイアス	: 「これくらいは普通だ」と理解したがる傾向	おもな災害心理バイアスの種類 (重なりアリ)
楽観主義バイアス	: 「自分だけは大丈夫だ」と他人よりも自分は運が良いと思いきこむ傾向	
確証(追認)バイアス	: 「〇〇だから大丈夫だ」と自分に有利な情報を集める傾向 いったん決断をおこなうと、その後得られた情報を決断した内容に有利に解釈してしまう	
集団同調性バイアス	: 「みんなと一緒になら大丈夫」と他人に同調することで安心だと思う傾向	
後知恵バイアス	: 過去の事象を全て予測可能であったと思う傾向	
帰属誤認バイアス	: 影響の過小評価、個人特性の過大評価によって人の行動を説明する傾向	
生存者バイアス	: 何らかの困難な状況をうまくやり過ごした人・物・事を基準として判断を行う傾向	
アンカリングバイアス	: ある事象(評価)に関して与えられたヒントに引きずられ、後に提示されたものより最初に提示したものに偏る傾向	

## 7①. これからの行動「10の項目」について【全学年】 87.4%が同意（9割超えは7項目）

<とても思う+思う>

### BEST 3

- ① 大学には、いろんな環境下にある学生の状況を踏まえて柔軟に対応してほしい
- ② 十分に情報を得た（知った）うえで「自分が大切にするものを守る」ために自分自身で決めることが重要
- ③ 個人の状況を知らずに「同調圧力」をかけたり差別をしないようにしたい

ワーク1・2の結果をもとに有志の学生と一緒にワーク3を実施して整理した「10の項目」について聞いたところ、7項目で9割以上が「同意できる」と答えています。とくに同意度が高かった項目は上記3項目で、“常に情報が変化し、アップデートされている事を意識しておきたい”（93.0%）、“知らないうちに感染する可能性があるウイルス特性を知って行動したい”（92.8%）でした。また、“『災害心理バイアス』があることを理解した方がよい”（44.2%）については、「思う」と答えた人のなかで最も高い割合を占めています。また、項目の中で一番同意度が低かった“もっと政府や行政が強く示すべきことがあり、個人でできることは限られており何をすべきかは考えにくい”（63.6%）と、「不同意」（2.1%）にも注目したいとおもいます。 [アンケート②]

表7-1：これからの行動「10の項目」の同意度【全学年】

N=943（上段人/下段%）

	とても 思う	思う	どちらとも いえない わからない	あまり 思わない	全く 思わない
知らないうちに感染する可能性があるウイルス特性を知って行動したい	489 51.9	386 40.9	56 5.9	9 1.0	3 0.3
“災害心理バイアス”があることを理解した方がよい	367 38.9	417 44.2	153 16.2	4 0.4	2 0.2
「自己責任」を理由に軽率な行動は控えた方がよい	558 59.2	301 31.9	76 8.1	7 0.7	1 0.1
結果的に誰が責任を取る（取れる）のわからないまま「自己責任」は取りにくい	377 40.0	365 38.7	173 18.3	24 2.5	4 0.4
個人の状況を知らずに「同調圧力」をかけたり差別をしないようにしたい	552 58.5	327 34.7	61 6.5	2 0.2	1 0.1
変異株が出てきているので、気を緩めないで対応したい	554 58.7	308 32.7	63 6.7	14 1.5	4 0.4
常に情報が変化し、アップデートされている事を意識しておきたい	508 53.9	369 39.1	63 6.7	2 0.2	1 0.1
十分に情報を得た（知った）うえで「自分が大切にするものを守る」ために自分自身で決めることが重要	541 57.4	340 36.1	57 6.0	4 0.4	1 0.1
大学には、いろんな環境下にある学生の状況を踏まえて柔軟に対応してほしい	565 59.9	320 33.9	55 5.8	3 0.3	0 0.0
もっと政府や行政が強く示すべきことがあるなか、個人でできることは限られており、何をすべきかは考えにくい	282 29.9	318 33.7	234 24.8	99 10.5	10 1.1



## 7②. これからの行動「10の項目」について【学年別】 学年で大きな違いはみられないが 1・4年生の方が2・3年生にくらべて同意度が高い。

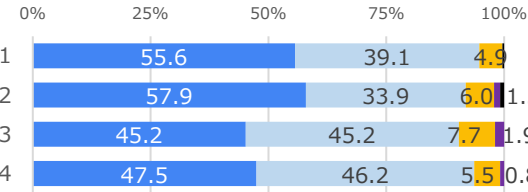
1年生：N=266  
2年生：N=233  
3年生：N=208  
4年生：N=236

学年で大きな違いはみられませんが、1年生で“大学には、いろいろな環境下にある学生の状況を踏まえて柔軟に対応してほしい”（95.9%）、“個人の状況を知らずに『同調圧力』をかけたり差別をしないようにしたい”（95.1%）、4年生で“常に情報が変化し、アップデートされている事を意識しておきたい”（94.5%）、“十分に情報を得た（知った）うえで「自分が大切に守るものを守る」ために自分自身で決めることが重要”（94.5%）が多くを占めています。

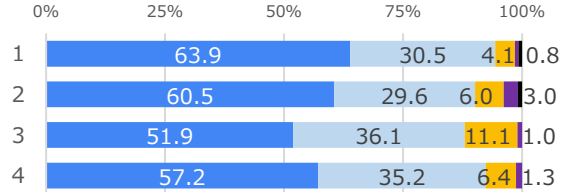
比較すると若干1・4年生で同意傾向が高く、2・3年生で不同意（わからない・どちらでもないを含む）が多くなっています。

[アンケート②]

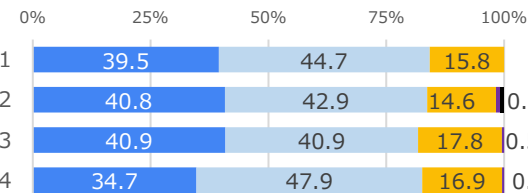
知らないうちに感染する可能性があるウイルス特性を知って行動したい



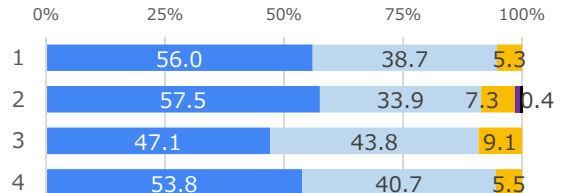
変異株が出てきているので、気を緩めないで対応したい



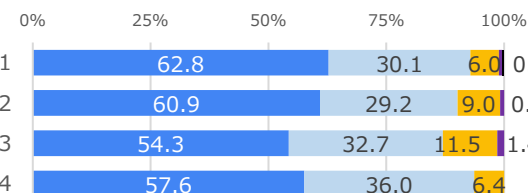
「災害心理バイアス」があることを理解した方がよい



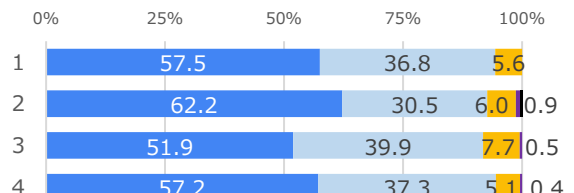
常に情報が変化し、アップデートされている事を意識しておきたい



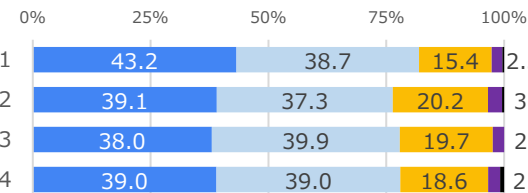
「自己責任」を理由に軽率な行動は控えた方がよい



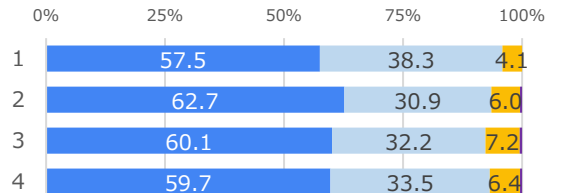
十分に情報を得た（知った）うえで「自分が大切に守るものを守る」ために自分自身で決めることが重要



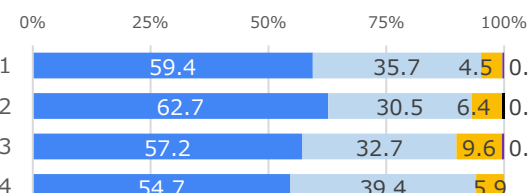
結果的に誰が責任を取る（取れる）のかわからないまま「自己責任」は取りにくい



大学には、いろいろな環境下にある学生の状況を踏まえて柔軟に対応してほしい



個人の状況を知らずに「同調圧力」をかけたり差別をしないようにしたい



もっと政府や行政が強く示すべきことがあるなか、個人でできることは限られており、何をすべきかは考えにくい

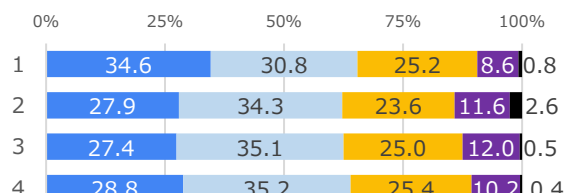


図7：これからの行動「10の項目」の同意度【学年別】

## 7③. これからの行動「12の項目」について【教員】 85.8%が同意傾向（24名全員同意が5項目）

<とても思う+思う>

### BEST 5 <同意度：100%>

- ① 知らないうちに感染する可能性があるウイルス特性を知って行動したい
- ② 変異株が出てきているので、気を緩めないで対応したい
- ③ 個人の状況を知らずに「同調圧力」をかけたり差別をしないようにしたい
- ④ 誰もがどこで感染するかわからないので、感染で過度な責任追及や差別助長がないよう気を付けたい
- ⑤ 常に情報が変化し、アップデートされている事を意識しておきたい

教員用に整理した「12の項目」について聞いたところ、上記5項目で24名全員が「同意できる」と答えています。ついで、“『災害心理バイアス』があることを理解した方がよい”（95.8%）、“自己責任を理由に軽率な行動は控えた方がよい”（91.7%）でした。そして“いろんな環境下にある学生の状況を踏まえて柔軟に対応したいものだ”（87.5%）、“十分に情報を得たうえで自分が大切に守るものを守るために自分自身で決めることが重要。”（83.4%）も8割を超えています。 [アンケート②]

表7-3：これからの行動「12の項目」の同意度【教員】

	とても 思う	思う	どちらとも いえない わからない	あまり 思わない	全く 思わない	計 上段-件数 下段-%
知らないうちに感染する可能性があるウイルス特性を知って行動したい	22 95.7	1 4.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	23 100.0
「災害心理バイアス」があることを理解した方がよい	18 75.0	5 20.8	1 4.2	0 0.0	0 0.0	24 100.0
「自己責任」を理由に軽率な行動は控えた方がよい	19 79.2	3 12.5	2 8.3	0 0.0	0 0.0	24 100.0
結果的に誰が責任を取る（取れる）のかわからないまま「自己責任」は取りにくい	15 62.5	3 12.5	6 25.0	0 0.0	0 0.0	24 100.0
誰もがどこで感染するかわからない状況。感染で過度な責任追及や差別助長がないよう気を付けたい	19 79.2	5 20.8	0 0.0	0 0.0	0 0.0	24 100.0
個人の状況を知らずに「同調圧力」をかけたり差別を助長させないように気を付けたい	19 79.2	5 20.8	0 0.0	0 0.0	0 0.0	24 100.0
変異株が出てきているので、気を緩めないで対応したい	20 83.3	4 16.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	24 100.0
常に情報が変化し、アップデートされている事を意識しておきたい	18 75.0	6 25.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	24 100.0
十分に情報を得た(知った)うえで「自分が大切に守るものを守る」ために自分自身で決めることが重要	16 66.7	4 16.7	4 16.7	0 0.0	0 0.0	24 100.0
いろんな環境下にある学生の状況を踏まえて、授業や登校方式などを柔軟に対応したいところだ	18 75.0	4 16.7	1 4.2	1 4.2	0 0.0	24 100.0
大学とは本来もっと自由であるはずだが、この状況下では管理・指導が強まるのは仕方ない	10 41.7	8 33.3	5 20.8	1 4.2	0 0.0	24 100.0
もっと政府や行政が強く示すべきことがあるなか、個人でできることは限られていると思う	1 4.2	5 20.8	8 33.3	8 33.3	2 8.3	24 100.0

## 8. 今欲しいもの・あったらよいと思うもの：約半数がCOVID-19環境下での情報交換・交流の機会を、約3割超が先生との学びの場および気軽に相談できる場を求めています。

全学年の約半数が、“今の環境でもできそうな活動や勉強手法など知りたい（みんなと情報交換したい）”（44.7%）と、“オンラインでも友達を作ったりコミュニケーションが取れる場や交流の機会を増やしてほしい”（42.6%）を選んでいきます。ついで、“オンラインでも先生に教えてもらう機会などをもっと作ってほしい”と“気軽に相談や悩みを話せる場がほしい”が3割前後を占めています。

学年は、1年生で“オンラインでも友達を作ったりコミュニケーションが取れる場や交流の機会を増やしてほしい”が6割と最も多くを占め、2・3年生で、“オンラインでも先生に教えてもらう機会などをもっと作ってほしい”が続きます。4年生では、突出したものは無いようです。また、下宿に関する項目は、下宿生にとっては想定以上に課題があることが分かりました。とくに孤立しがちな状態が予想されることから具体的な支援が必要ですね。

[アンケート②]

表8：学年別 今欲しいもの・あったらよいと思うものの

	全学年		1年生		2年生		3年生		4年生	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
今の環境でもできそうな活動や勉強手法など知りたい（みんなと情報交換したい）	421	44.7	122	45.9	102	43.8	105	50.7	92	39.0
オンラインでも友達を作ったりコミュニケーションが取れる場や交流の機会を増やしてほしい	401	42.6	147	55.3	88	37.8	75	36.2	91	38.6
オンラインでも先生に教えてもらう機会などをもっと作ってほしい	318	33.8	86	32.3	83	35.6	78	37.7	71	30.1
気軽に相談や悩みを話せる場がほしい	258	27.4	67	25.2	56	24.0	71	34.3	64	27.1
下宿しているが人と会えていないのでもっと交流の機会が欲しい	182	19.3	46	17.3	56	24.0	37	17.9	43	18.2
下宿が難しい環境なので、短期・単発でも柔軟に利用可能な住まいがほしい	68	7.2	13	4.9	13	5.6	21	10.1	21	8.9
その他	34	3.6	6	2.3	12	5.2	6	2.9	10	4.2
計	942	100	266	100	233	100	207	100	236	100

【あればよい・ほしい】先輩の勉強方法を知りたい(1年)/オンラインのイベントで人数制限をなくしてほしい(1年)/趣味を話せる場(2年)/オンラインでの交流では友達まで発展しないので少人数での対面の交流会が出来ればよいと思います(2年)/感染対策をしてできれば学校に行きたい(3年)/サークル活動をただ単に禁止するだけでなく、ガイドラインを設けて行えるようにしてほしい(3年)/アクリル板等を用いて安全な対策を行った上で、対面でのコミュニケーションや交流が出来る場(4年)/企業や事業者などによって感染症対策が徹底されたレンタルルームでの仮ホームパーティー会場(一室程度の広さ、数人を想定)など(4年)/同じ学部の中で、就職活動について話し合う(情報交換など)場がオンライン上にもっとあったらよかったと思う(4年)/

【授業方法等について】遠方から通学している人などもいるので、ハイフレックスとして分けるのではなく、オンラインか対面を自由選択させてほしい(1年)/初めての人にオンラインで話すのは気まずすぎるのでそういう機会はいらないと思う(1年)/実家に帰省したいため、オンラインのみで授業やテストを行ってほしい(2年)/朝の満員電車を避けるために1限目の時間をずらしたり、オンラインにしたり、ペーパーワークにしたりしてほしい。今一番感染リスクが高いのは電車だと思う(2年)/建築を見に行くことができないので、新建築のような資料がもっと欲しい(2年)/絶対に対面の授業をつくるのではなく、対面でも可能な授業の方がやりやすいし、オンラインの後に対面の授業もあるので、通学時間が2時間かかる私からしたらその日は結局1限目から学校に行かないといけないので、そういった面も考えてほしい(2年)/同級生とコミュニケーションを取れる時間を授業内に確保してほしい(2年)/授業は時間通りに行うがいつでも動画が見れるようにズームを録画して投稿してほしい(2年)/どうせオンラインで勉強するならば、学期スタート時点で全ての授業動画を公開して欲しい。そして自分のペースで勉強させて欲しい。オンラインなのに意味のない時間割に合わせる事が意味不明かつ非効率極まりない(3年)

【学費の減免、給付、支援等について】2年生：3件、3年生：1件、4年生：4件



## 9. 感染収束後に注目するテーマについて、約半数が“テレワークなど新しい生活スタイルを受け止めるデザインや技術”、“感染症対策を契機とした建物のデザインや計画”に興味をもちます。

建築学部で学んでいるなかで、Covid-19パンデミック後の新たな社会を考えたとき、注目される可能性のあるテーマとして興味がある項目を選んでもらったところ、約半数以上が“テレワークなど新しい生活スタイルを受け止めるデザインや技術”、“感染症対策を契機とした建物のデザインや計画”を選び、4割が“新たなコミュニティの形やつながり方・居場所の計画”を選んでいました。

学年では大きな差はありませんでしたが、若干1年生で“IoT・VR・AIなどの情報技術を活用した建築・まちづくり”、3年生では“オンラインを活用したコミュニケーション手法・技術”が多く選ばれていました。

この項目については、教員アンケートで6割（19名）の先生が検討または検討中と答えています。具体的に記述された先生のテーマは下欄を参照してください。 [アンケート②]

表9：学年別 感染数足後に注目するテーマ

	全学年		1年生		2年生		3年生		4年生	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
感染症対策を契機とした建物のデザインや計画など	446	47.3	141	53.0	109	46.8	90	43.5	106	44.9
感染症対策を契機とした素材や環境計画（技術）など	267	28.3	77	28.9	59	25.3	68	32.9	63	26.7
IoT・VR・AIなどの情報技術を活用した建築・まちづくり	295	31.3	93	35.0	68	29.2	67	32.4	67	28.4
テレワークなど新しい生活スタイルを受け止めるデザインや技術	463	49.2	125	47.0	104	44.6	120	58.0	114	48.3
都市からの移住や2地域で居住するなどの新たな住まい方	280	29.7	70	26.3	71	30.5	72	34.8	67	28.4
新たなコミュニティの形やつながり方・居場所の計画	386	41.0	81	30.5	103	44.2	112	54.1	90	38.1
オンラインを活用したコミュニケーション手法・技術	295	31.3	67	25.2	61	26.2	89	43.0	78	33.1
新たな移動手段や流通システムによる建築とまち	197	20.9	51	19.2	48	20.6	53	25.6	45	19.1
自然災害に加えて防疫・公衆衛生を含む災害（避難）対策	168	17.8	43	16.2	37	15.9	51	24.6	37	15.7
その他（あなたが興味をもつテーマ）	3	0.3	0	0.0	0	0.0	2	1.0	1	0.4
計	942	100	266	100	233	100	207	100	236	100

その他

【その他】 換気手法の新たな発展（3年）／建築というハードウェアの重要性が年々低くなっている現実（3年）／あてはまらない（4年）

【教員アンケート】 講義室や飲食店舗の利用（着席状況、座席レイアウト、換気など） [長澤] ／パーソナルネットワークが遮断された子育て家族の支援など [関川] ／住宅からの徒歩圏内における街の多機能化 [宮部] ／危機における建築史・都市史 [會田] ／コロナ禍ステップハウス・公衆衛生とまちづくり・避難ユニット・NXとコミュニティ [寺川]

1. **感染者が身近にいる** ひとが、**全体の約半数（4年生で6割）**
2. COVID-19の **情報入手先は、「新聞やTVのニュース」が7割、SNSは15.6%**
3. 大学から発信されている情報について、「**知っている**」・「**聞いたことがある**」が**半数**。今回のワークをとおして、全体で「**知っている**」（今回の契機に内容まで見たを含む）が**66.2%**と**3割増加**し、1年生の認知度も4年生に次いで高くなりました。
4. COVID-19については、**約7割が深刻に受け止め、危機意識を持っていましたが** 今回のワークによって**全体の9割**に増え、**約3割が改めて危機意識が高まった**と答えています。
5. アンケート結果に関して、あなたの思いと他の人の思いについて **同じ傾向** だと思った人は **8割**を超えています。「**どちらともいえない**」は**17.2%**ですが**学年が上がるほど増え、4年生では25.4%**を占めています。
6. 学生のインタビューをもとに仮設定した『**13の意識タイプ**』 **全体の約6～7割が同意できるとしています。**  
『13の意識タイプ』が示すメッセージは、『**自己責任**』って？／**危機意識と気づき**／**逡巡する思い**／**経験して変わる危機感**／**自粛の長期化によるフラストレーションと対策希求**／**「守るべきもの」とは？誰が決めるのか？**／**社会対策**／**答えが出ない苛立ち**／ですが、この項目で示された多くの事象を読み取ることで、自分と他人との意識の違いや状況を受け止める「**気づき**」のきっかけになったといえます。
7. これからの行動「**10の項目**」について **全学年で87.4%が同意（9割超えは7項目）**  
Top3は、「**いろいろな環境下にある学生の状況を踏まえて柔軟に対応してほしい**」、「**十分に情報を得たうえで自分自身で決めることが重要**」、「**個人の状況を知らずに「同調圧力」をかけたり差別をしないようにしたい。**」でした。教員のアンケートでもほぼすべての項目で同意、「**いろいろな環境下にある学生の状況を踏まえて柔軟に対応したいものだ**」も9割近くを占めています。
8. 今欲しいもの・あったらよいと思うものについて、**半数がCOVID-19環境下での情報交換・交流を、3割超が先生との学びの場を求めています。**
9. 感染収束後に注目するテーマについて、**約半数が「テレワークなど新しい生活スタイルを受け止めるデザインや技術」、「感染症対策を契機とした建物のデザインや計画」に興味をもっています。**



# 10. 自由意見やワークコメントから① <原文はp.35~>

- 自由記述は66件。自分の意識や姿勢(12)に関する意見と、自分と他人の意識差(10)に関するもの、不安(18)や怒り(15)、社会への不満(15)、自粛に絡んだ意見(12)が多く記されています。その他、授業に関係する不安や要望(20)が多く寄せられていました。また、意見をキーワード分類して特徴を抽出したところ(右図)、感染に関する考えや自分自身、家族や医療に関する記述と政府対策 [01-05]。通学に関するリスクや不安[02]、授業方法や大学に関する記述 [03-06-09]、メディアや若者に関する記述[04]がみられました。学年別では、1年生で「自粛」「医療」、2年生は「ワクチン」「メディア」、3年生で「自分自身」「不安」、4年生で「学生」「学費」などが特徴的なワードとして出ています。

自由コメント

ワーク  
まとめ

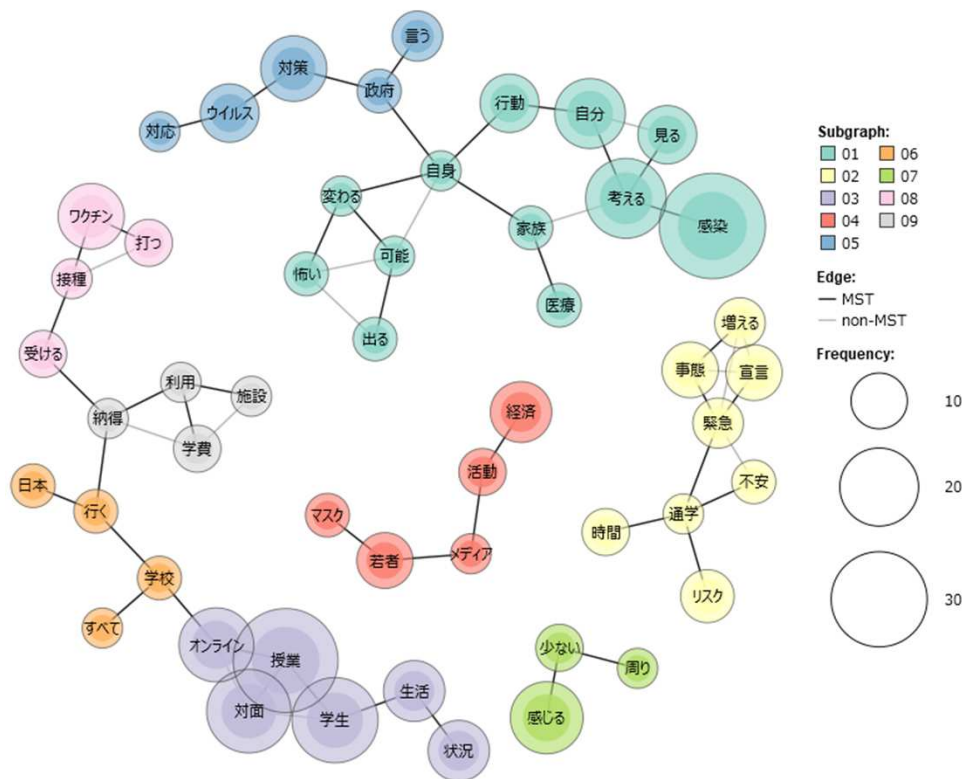


図10-1：テキストマイニングによる共起ネットワーク図

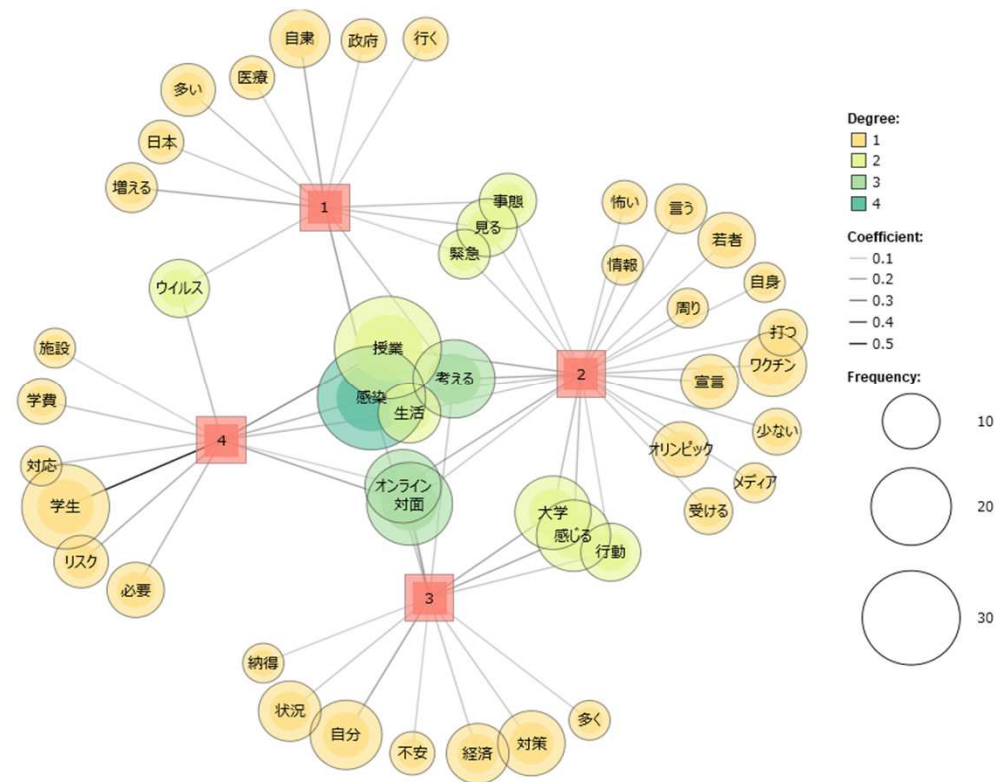


図10-2：学年変数を入れた共起ネットワーク図

## 10. 自由意見やワークコメントから② <原文はp.35~>

- ゼミのワークで集約された皆さんの意見は296件(1年生:229、4年生67)。アンケート①の結果報告を受けた後のワークでしたので、アンケートに対して『周囲の状況が確認できた』(157)、『自分の姿勢の再考』(126)、『今後を考える機会になった』(127)に関する記述が最も多く、『自分と他人の意識の違い』(113)、『危機感』(97)に関する意見が多くみられました。その他、不安や驚き、怖い、怒りなどの感情や、フラストレーション、社会やに関する違和感、大学の登校や授業に関するものがありました。またワーク①での自由記述は主に1年生が大半を占めており、4年生は比較的自主的に答えた形式であったことが差に表れているものと考えられます。内容としては、4年生では全体を通じて前向きな意識と消極的な意識が混在していますが、4年生から1年生に対する思いやる意見もありました。その他、学生への精神ケアの場を求める声や、ワクチンに関する調査などの要望もありました。

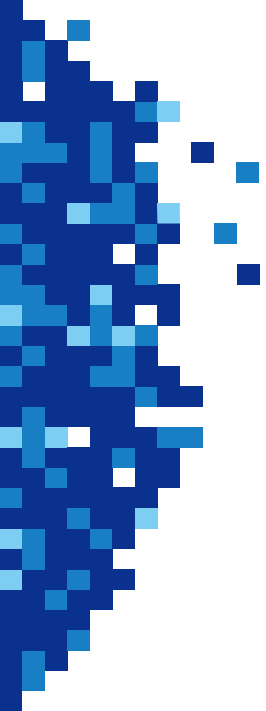
表10：ワーク2の意見集約

	アンケートについて		情報				意識						生活・大学					感情				その他				質問 要望	計			
	周辺 状況 意見	再考 の機 会	情報 不足	身近 な情 報	要 因	家 族	自分 の姿 勢	意識 の違 い	危機 感	ハイ アス	やり すぎ	自己 責任	対策 意識	元の 生活	自 粛	通 学	大学 施設 利用	対 面 授 業 等	仕 事	不安	驚 き	怖 い	フラ ス ト レ ー シ ョ ン	怒 り	世 代			ワ ク チ ン	オリ ン ピック	社会 への 違和 感
1年生	54	58	23	0	3	2	52	53	48	3	1	20	37	12	19	4	6	9	2	24	17	11	10	9	10	16	1	9	3	229
%	23.6	25.3	10.0	0.0	1.3	0.9	22.7	23.1	21.0	1.3	0.4	8.7	16.2	5.2	8.3	1.7	2.6	3.9	0.9	10.5	7.4	4.8	4.4	3.9	4.4	7.0	0.4	3.9	1.3	100.0
4年生	61	51	0	9	40	15	7	51	44	33	9	1	4	44	7	4	3	2	4	0	7	10	2	3	1	1	5	1	4	67
%	91.0	76.1	0.0	13.4	59.7	22.4	10.4	76.1	65.7	49.3	13.4	1.5	6.0	65.7	10.4	6.0	4.5	3.0	6.0	0.0	10.4	14.9	3.0	4.5	1.5	1.5	7.5	1.5	6.0	100.0
合計	157	126	40	101	20	13	127	113	97	13	3	30	105	25	38	10	8	15	2	40	30	23	19	16	15	27	4	16	5	296
%	53.0	42.6	13.5	34.1	6.8	4.4	42.9	38.2	32.8	4.4	1.0	10.1	35.5	8.4	12.8	3.4	2.7	5.1	0.7	13.5	10.1	7.8	6.4	5.4	5.1	9.1	1.4	5.4	1.7	100.0

### 自由コメント

- アンケート②のゼミ・ワークで集約された皆さんの意見は79件(1年生:25、2年生:21、3年生:24、4年生:11)ありました。おおむね、「みんなの思いを聞いたので不安が解消した。」、「自分の気づきや立ち位置(距離感)を知る契機となった。」、「今後の行動につなげたいと思った。」という人が多いでしたが、「そもそも意識が低い人は答えない。」、「私はきちんとしているので関係ない。」と考える人もいます。また、4年生の自由記述が少なく、1~3年生で不安や悩みが多く語られています。とくに、1・2年生にとっては、このパンデミックによって本来の大学生活が送れないなか、このワークを通して、不満はあるもののなんとか頑張ろうという気持ちが生み出していました。

## ワーク まとめ

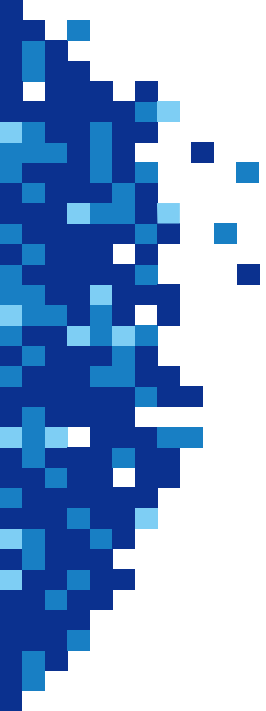


## 総括①

## ワーク まとめ

- 今回の**ワークの目的**は、COVID-19禍での学生生活における不安や課題があるなかで、今私たちができることとして、皆さんのつぶやきひろいからはじめ、**①自分と周囲の思いの違いや悩みの共有の場づくり**、**②表層的理解ではない「気づき」の創出**、そして**③心理的支援や今後の教育的対応について考える機会**を作ることでした。そこで、**アンケートによるアクティブラーニング方式**を取り入れ、皆さん自身の今後の行動につながる契機になることを期待して実施しました。
- このワークは、学生有志が参画しながら学部全体で実施しました。約1.5か月という短い間のワークでしたが、皆さんの協力を得た結果、**学部全体で約8割の回答があり、400を超えるコメント**が寄せられました。この環境下における皆さんの関心の高さが表れています。
- 今回のワークによって、「**みんなの思いを聞いたので不安が解消した。**」、「**自分の立ち位置（他人との距離感）を知る契機となった。**」、「**今後の行動につなげたいと思った。**」という人が多くいたことから、**このワークの意義は一定果たされた**と思います。また、人の話や状況を聞くこと（立場をイメージすること）によって、少しずつではありますが「気づき」が生まれたようです。とくに、「**知らないうちに感染する可能性があるウイルス特性を知って行動したい**」という**認識が強まった**と思います。
- **危機感について**は、強い危機感を持っている学生と、そうでない学生が同様に存在し、行動要素として経験やつながりで意識に差があるようです。また、自粛や防疫意識が高い人でも、他者に対しては寛容になる（尊重する？）傾向があることがわかりました。
- **危機意識が低い人に対して**、「はやく気付いてほしい」という意見と、「興味がないのでこのような取り組みも響かないのではないか。」などの意見がみられました。アンケート内容についても、「あたりまえの内容が多いので、みんな同じ答えになるのでは？」、「そもそも意識が低い人は答えないのだからやっても意味がない。」、「私はきちんとしているので関係ない。」などのコメントもありました。



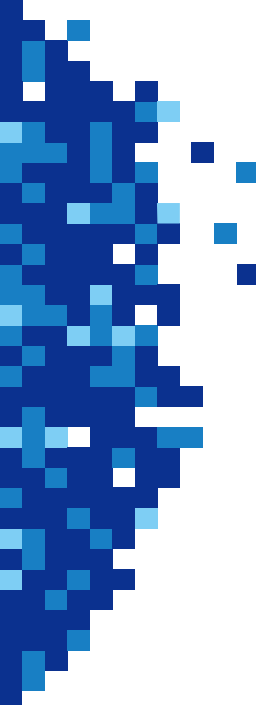


## 総括②

# ワーク まとめ

- **「自粛」の必要性**はわかるものの、自分や家族の生活環境が厳しい人もおり、学生のストレスは大きくなっていることもわかりました。学生時代をこんな形で過ごさなければならない状況について、誰にぶついたらよいかわからないフラストレーション、場当たりの見えのない「自粛」（の長期化）しか示さない社会に対する違和感、とくに政府や行政自体が自粛していないという事態に対する怒り、緊急事態宣言解除と自粛要請の齟齬などへの違和感も吐露されました。
- **大学の授業等**についても多くの意見が集まりました。対面授業の可否についても学生による思いに様々な違いがあることがわかりました。その他、授業料の減免や給付などの生活支援をはじめ、登下校時の対策などの心配や試験方法など柔軟な対応を求めるひが多いようです。少数ではありますが、「何をしてよいかわからない」や「この状況に慣れてきた」などの思いもあがっています。
- **情報について**は、新聞やTVニュース等によるものが多いものの、WEBから入手する（溢れる）様々な情報も含めて、情報そのものに不信感を持つ意見や、特定の情報に傾倒するものもみられました。とくに、ワクチン接種については悩み事として表出しています。大学の発信する情報をはじめ、今回の結果も含めていろんな情報をしっかりと入手し、それを多方面から確認し、「思考停止」せず、「できることから」行動していくことも大切だと思います。
- 本ワークでは**「自己責任」とはなにか**が議論されていました。今回の調査で、多くの学生がこの言葉を「自分勝手な行動」として捉えていることがわかりましたが、そもそも「自分で責任がとれれば問題がない」という意識と「責任などとれないし、だれの責任か問えない」という文脈でも話されています。社会的圧力も影響している現状では、「誰が」「誰に」も含めて判断は難しいですね。少なくとも、簡単に責任がとれない、わからない状況では、一概に責任という言葉は使いにくいことがわかりました。
- 今回、この「責任」のとらえ方と同時に、**「災害認知バイアス」、「同調圧力」**など重要なキーワードが出てきました。多くの学生が、このような非常時・災害時におこる現象をよく把握し、一方的な決めつけで（相手の状況を知らずに）忌避や差別につながらないように配慮すべきことも大切ですね。



- 
- このワークをきっかけに、やらない（やれない）理由を考えるのではなく、やらされるのでもなく、**自分事として何ができるかについて考えるきっかけになればよいと思っています**。その意味でも、今回得られたつづきや課題を今後どのように展開するかがとても重要だと考えています。それは、学生の皆さんだけに限りません。私たちも、具体的な取り組みを進めたいと考えています（本ワークでいえば、とくに8・9の内容）
  - ワークの意見のなかには「やっても意味がない」や「何もできない・してくれない」、などの対案（行動）なき批判もありますが、**何が正しいかわからないこの状況では、やることに「意味がない」ことなどなく、いかに自分のものにしていくかが重要**です。自分や考え方・やり方が正しい・あたり前だと思っていたことが実は違っているかもしれないし、違いを知ることやそれを受け止める力、分かろうとする力が必要になるかもしれません。そして、変わるはずがないと思っていたことが**あなたの行動によって周囲が少し変化するかもしれません。「思考停止」しない気持ちが必要なのかもしれないですね**。
  - ポイントは、目まぐるしく状況が変化している現状では、玉石混交の情報から、**いかに正確な「情報」に基づいて（得やすい環境下で）意思決定して自ら行動することが大切**なのだと思います。災害心理バイアスを認知しつつ、同調圧力などにも気を付けていきましょう。その意味で、このワークでは、多くを占める側にいるから良い、少ないから悪いというものでもなく、逆に少ない意見や判断を保留しているもの、意見を言いにくいもの、そして自由記述の内容も注視したいとおもいます。
  - 長い一生のうちで、**この困難をどう乗り越えたかは、みなさんにとって必ず大きな糧になる**と信じています。かつて私も大学院の時に遭遇した「阪神・淡路大震災」では大きな試練がありました。その時に、出会った人や経験は、今の私にとっては欠かせないものになりました。**社会が求めるポストCOVID-19『ニューノーマル』の時代は、まだ誰も経験したことがないチャレンジな社会**です。何を残すのか、何が変わるのかなど、みんなが当事者であり、専門家となる時代かもしれません。困難にぶちあたっている今の経験を、新しいものを生む機会だと思って今後活かしてほしいと思います。
  - **ワクチン接種**も始まり、現在の閉塞的な事態を変える「**ゲームチェンジャー**」として期待されています。大学では、いち早くその場をつくり、皆さんの学習環境を整えるべく様々な対応を進めているところだと思います。しかし、いろいろな点で、皆さんの思いとのギャップが生じているようにもみえます。
  - 今いえることは、学生、大学、教員、学生間を含めて「**相互不信**」が生じないように情報を丁寧に共有し、**実感や信頼が伴う関係が必須**です。**不正や不誠実な行動で信頼を失うことがないように「縮尺（立場や環境）を超えた想像力」を発揮し、互いにできることから始めることがこの災害を乗り越える特效薬**だと信じています。

さいごに

# 建築学部 教員からの メッセージ①

教員アンケートより

## Q. 学生に対してメッセージがありましたらお願いします。

- 状況の変化に応じて、その中で出来ることを模索することを学んで欲しい。
- 対面授業ではなくて自宅等で受講するメディア授業（オンライン・オンデマンド型授業）の場合、学生も教員も自分で自分の生活習慣や受講態度をコントロールすることが求められます。今後、授業形態が変わっても、メディア授業の期間に身に付けた自律的な生活習慣や学習態度を続けられるよう、お互いに意識を高めましょう。

## Q. 現状を鑑み、学生支援等に関して今後取り組んだ方がよいと思われることがありましたらご記入ください。

- 大学で学ぶ意味を再認識させる取り組みがあってもいいと思います。各先生方がお伝えになっていることと思うのですが、いまいち伝わっていない学生もいるように思います。リモート授業に疲弊している一方で、テストにおける不正行為などあってはならない事象もあります。今一度、高等教育をいかに自分の中に位置付けて、その上で何になろうとしているのかなど、社会批判をする前に自分への問いかけをしてもらいたいと思う場面に出逢います。学び方の多様性、選択性が増えたことをチャンスと捉え、力を抜いたり要領の良さを考えたりするのではなく、最大限にIoTを活用した学習が自分の次の人生の何に結びつくのかなど、本来の大学教育をしっかりとしていく必要があると考えています。
- 奨学金等。下宿生に対する金銭援助
- コミュニケーションの場・機会の提供

## 【自由記述】

- まだ1～2年はこの状態が続くのではないかと思うのでその間は慎重に行動したい。
- 緊急時下に学習することの意味がある/ないという議論。大学の存在について。
- 日本の場合、国としての有事に対する法整備が出来ていないので、諸外国のような人流に対しての私権制限をしていません。(それはそれで問題と思います)それにもかかわらず感染者が少ない事は素晴らしいと思います。私権が制限できないなかで、最近の緊急事態宣言慣れで人流が減らないのは、「感染しない、させない」の各自の自覚が足りない事が原因と思います。日本の場合の感染防止は、国民一人一人の努力の積み重ねだと思います。
- アンケート中に意図がよく分からないものがありました。①「自己責任」を理由に軽率な行動は控えた方がよい括弧書きにはなっていますが、定義不明な自己責任を前提に行動云々をに関する自身の考えを述べることは難しいです。「自己責任」という概念自体に危険性を感じます。答えようがありません。②結果的に誰が責任を取る（取れる）のかわからないまま「自己責任」は取りにくい私には問うている内容が理解できませんのでお答えいたしかねます。③十分に情報を得た（知った）うえで「自分が大切に守るものを守る」ために自分自身で決めることが重要。これも設問の条件があいまいで回答不能です。どのように答えてもこの設問は間違いになるのではないのでしょうか。十分に情報を得ることはできるのでしょうか。増しては「知った」とはどのような状態を指すのでしょうか。自ら「得た」「知った」と勝手な基準で考えてしまうことに危険があると思います。④大学とは本来もっと自由であるはずだが、この状況下では管理・指導が強まるのは仕方ない。全体として管理の強化やむなしとまとめることはできません。個別の案件についてきめ細かく考えるべきことです。安易な二択は本質をゆがめてしまうと思います。

# 建築学部 教員からの メッセージ②

2年生講義 自校学習 より

- ◆ **【岩田】** 皆さんが思うより建築はいろんな分野があり、この学部にもいろんな先生がいるなかでみなさんが知らない領域もあると思います。自分の既成概念にとらわれず、建築ってこんなこともできるんだと考えて自分のしたいことをやがて見つけてほしいと思います。<感染症パンデミックはさまざまな影響を社会や文化にもたらしますが、建築もその例外ではありません。例えばコレラ流行に端を発するパリ大改造は有名ですが、スペイン風邪流行を境に、いわゆる近代主義建築が欧米で浸透していった一因に、保健衛生に対する価値観や思想が影響していることなども建築学者Beatriz Colominaにより指摘されています\*1。今回のコロナ禍でも、既に様々なデザイナーが感染リスクを減らす設計理論を提唱したり、企業レベルでもPandemic Ready Designの考えを提唱する\*2など、建築や都市の在り方に新たな変革が求められています。ぜひ皆さんも、ポストコロナ建築について考えてみてください。\*1 X-Ray Architecture(2018),\*2 清水建設研究報告(2020) : アンケートコメント分より>
- ◆ **【垣田】** 社会に出るときには、この専門分野を生かすだけでなく、新しく開拓する分野にも広げていかないとダメだと思いますので、学生時代から人の話を聞いたり、いろんなアンテナを張って新しい道を切り開いてほしいと思います。
- ◆ **【関川】** 近大にはこれだけ多くの先生がいて、それぞれに興味の範囲が広く、先生方の引出しが多いのが特長だと思います。ぜひその環境を生かしながら、社会で発言することを学生の時からどんどんやってほしいと思います。論文やコンペなど皆さんが社会から評価される機会にチャレンジしてほしいと思います。
- ◆ **【鈴木】** コロナでいいにくいですが実際体験することが大切です。今のうちにこれを見たいというものを調べておいて、コロナが終焉したらぜひ旅行してください。グーグルマップや建築雑誌などの情報もうまく活用してください。
- ◆ **【菅原】** 私自身、日本刀とかミニ4駆とかもいろんな分野に興味を持っていたのですが、その知識が研究するにあたって役に立っています。今このような状況ですが、投げやりにならず、建築に限らず色んな分野に興味を持ってほしいと思います。
- ◆ **【宮原】** 建築デザインについていえば、自分のポートフォリオを常に最良の状態にしておくのが1番大事だと思っています。いざ必要な時にバタバタしていたら絶対に間に合いません。とくにアメリカだと、本当にその1つの会社ですと就職と同じなどなくキャリアアップしているようなところなので、どこでそういうチャンスが巡ってわかりません。私は、学生のうちからポートフォリオをずっと更新し続けてきました。みなさんもそうしてはどうかと思います。
- ◆ **【松宮】** 今は情報技術の発展がすごいです。構造設計でAIなんかが入ってくると人間がやることがなくなってしまうなんていうことも考えられます。早い段階から使えるように、どういうものであるのかとかも含めて取り組んでほしいともいます。やっぱり先生にやらされるのではなく、自分で興味を持ってやらないといけないことだと思います。
- ◆ **【高岡】** 本来なら休みには海外の建築をみに行ったりしたいところだと思いますが、なかなかできない今オススメするのは、日本各地の有名な建築。それも無理なら自分が暮らしている町の建築に注目して欲しいです。家の周り散歩するのは怒られないと思います。自分の周りにも実はよくよく観ていくと、すごく価値のある建築とか設計者が見えてきたりするので、この状況を機会として自分のまちを見直してみるとまた視点が変わって面白いと思います。
- ◆ **【奥富】** 就職担当の視点からみても、近畿大学の建築学部は、活躍されている先生方がそれぞれいろんな活動をされていますので、そういったものを見ながら自分の将来どういう風に仕事をしたいのかを同時に考えながら進んでほしいと思います。仕事というのは、1つ1つやったことがつながっていくものだと思いますので、ぜひその辺りを考えながら残りの大学生活充実させていただきたいと思います。
- ◆ **【岸本】** ちゃんと実力を自分のものにしてください。そうでないと困ります。ということを実際に言いたいと思います。
- ◆ **【佐野】** 今は受身であることが多いとおもうので、何か疑問に思ったことは自分で探しに行くとか、これなんだろうを考える力を付けていくなど、自分が動くことを考えてほしいと思います。



# 建築学部 教員からの メッセージ③

2年生講義 自校学習 より

- ◆ **【岩前】** 青春の真只中にいる皆さんですから、いかような時間の使いかたもあると思います。ただ、人のせいにはしないでほしいなあと思います。今の世の中にあっては、「家の中にいる。」とか「オンラインで大学に来るな」といわれるなど、本当に大変な時期だと思います。だからこそできることもあると思いますので、プラスの方向に目を向けてもらえないかと願っています。人に文句を言うだけでは何も力もつかないし、時間の無駄になるので頑張してほしいと思っています。
- ◆ **【池尻】** 我慢ももうすぐだと思しますので、そんなに深刻にならずに、世界史上のものすごい事件を体験しているというぐらいの感じで、研究もそうですが、逆手にとって何か楽しむぐらいよいと思います。もうちょっと頑張って乗り切りましょう。
- ◆ **【長澤】** これから建築を学んでいくと、「あれ？自分向いていないんじゃないか？」という気になる人もいると思います。とくにこういう時期ですし、人と接することもできないですが、自分の能力を生かせるという意味では建築という分野はかなり広いので、あまり深刻にならず、気楽に楽しむぐらいがいいかと思います。頑張ってください。
- ◆ **【松本】** キャンパスに来れない時が続いていますが、やっぱり大学の良さっていうのは自由にものを考えられるところだと思います。それは、キャンパスでなくてもできることもあるかと思えます。そういう4年間を！とか、ぜひ充実させてください！など言うと説教くさいのですが、自分のために自由に考えながら建築に携わっていただけたらいいかなと思います。
- ◆ **【野田】** 今こういう状況で皆と会えないので、かなりフラストレーションも溜まっていることと思います。でもこの大学4年間というのは人生のなかで、かなり重要な楽しい時期でもあるので、あの時だから何もできないっていうのではなくて、やっぱりそれなりにできることをみつけて、この状況の中での充実した生活を送ってもらいたいです。
- ◆ **【會田】** 学生生活っていうのは振り返ってみると重要な時期だと思います。勉強だけではなくて、いろんな経験ができる自由な時間が多い時期なので活用してほしいと思います。脳内は自由です。物理的制約はあっても、授業を聞いているときはコロナのことを忘れて集中していくことも大事かと思しますので、ぜひ皆さん頑張ってください。
- ◆ **【堀口】** これまでいろんな国の建築学校をめぐり、オンラインで講評などしている経験からいえば、この状況は僕らだけではありません。ロサンゼルスなどは、僕らより厳しい規制が敷かれたなかですずっとオンラインでしたし、オーストラリアもそうでした。台湾とか一部で対面授業をやれている国はありますが、世界中の建築の学生たちがあのオンライン授業をやって乗り切ろうとしています。意外とポジティブです。不満もあるかもしれないですが、世界中の君たちと同じ世代の学生たちは全力で乗り切ろうとしてる人達ばかりです。チャンスだと思います。チャンスを乗り切れる人にしかチャンスは来ないともいます。
- ◆ **【宮部】** コロナ渦で見直された価値観や生み出された新しいアイデアはこれからの社会でも活かされていくと思います。その最先端の状況下にいることをチャンスと捉えて建築や都市のこれからのあり方を考えてみてください。
- ◆ **【安藤】** コロナのようなパンデミックは国際的には自然災害とされています。これから長期間の復興がなされる中で様々な教訓が得られるはずです。それによってまちや建築住宅の在り方が変わるでしょう。皆さんも良く見て考えるようにしてください。
- ◆ **【村上】** 各先生方がお伝えになっていることと思うのですが、リモート授業に疲弊している一方で、テストにおける不正行為などあってはならない事象もあります。今一度、高等教育をいかに自分の中に位置付けて、その上で何になろうとしているのかなど、社会批判をする前に自分への問いかけをしてもらいたいです。学び方の多様性、選択性が増えたことをチャンスと捉え、力を抜いたり要領の良さを考えたりするのではなく、最大限にIoTを活用した学習が自分の次の人生の何に結びつくのかなど、本来の大学教育をしっかりとしていく必要があると考えています。（教員アンケートより追記）



# 建築学部 教員からの メッセージ④

2年生講義 自校学習 より

- ◆ **【犬伏】** 最近の学生なんか失敗をすることをやたら恐れているところがあるように見えるので、いろいろ失敗してトライアンドエラーをどんどん積極的にやっていただきたいなと思います。
- ◆ **【脇田】** コロナでいろいろと窮屈なあの環境にあると思いますが、いろんな人に会って色んな所に行って色々経験してほしいですね。もしインドネシア興味あれば、一緒に行きましょう。
- ◆ **【山口】** 皆さん自校学習でいろんな先生の話聞かれて、面白いと感じていることと思います。ぜひ、先生の研究の面白いところ聞きに行ってください。高齢者のことであれば私のところに来てください。若干、教員側もコロナで疲れているところもありますので、「締め切り過ぎたんですけど、どうしたらいいですか」などは答えるのがつらい時もありますので、「高齢者施設のことを学びたいんですけど、どの本がいいですか？」など言われたら元気出して教えていきたいなと思っています。ぜひ先生をうまく使っていただいて、コロナを乗り越えて頂ければなと思います。
- ◆ **【岡村】** コロナで人と会うのはなかなか難しい時代になっていると思いますが、本を通じて人と会うことが出来ると思います。私も今日のプレゼンテーションで、藤森さんや丹下さんの話をしましたが、やっぱり本っていうのは、図書館でも借りられますし、いくらでも読めます。是非たくさん本を読んでください。
- ◆ **【橋本】** (英語担当教員) コロナで海外はもとより国内すら旅行できないと思いますけど、やっぱりどこでもよいので海外に行ってみる機会があれば願っています。その時に一挙にコミュニケーションの手段でありグローバルlanguageである英語に興味を持つようになる子が多いのでそう思っています。自分自身もそうでした。難しいですけど、ぜひチャンスがあれば行って欲しいです。
- ◆ **【宮永】** (英語担当教員) 皆さんは、それぞれ卒業されて自分の専門分野につかれると思います。建築の中でもいろいろ専門分野は細分化されて分かれていますけど、どんな専門分野に行ってもいいように、ぜひ英語演習などで勉強しておいてください。
- ◆ **【バルー】** (英語担当教員) 好きなことを英語で試してみてください。それが一番の早道です。趣味でも専門でも好きなことを英語でみてください。ゲームが好きだったらゲームを英語で、映画が好きだったら英語の字幕でみるなどすればとても良い経験になると思います。
- ◆ **【阿波野】** 皆さん、これからも2年生、3年生、4年生と続きますけど、とにかくすべての科目について「一生懸命」頑張ってください。それが大事です。
- ◆ **【平栗】** 楽しんで勉強してくださいということと、せっかく学費を出して大学に来ているのですから、元をとって卒業してください。
- ◆ **【戸田】** 自分がどういう方向に進むかというのは意外となかなか予想できないものです。いろんなことを学んだことが今後生かされる時が来ると思いますので、あまり思いを狭めずに取り組んでください。建築学部には、優れた先生がたくさんいらっしゃいますので、いっぱい聞いて勉強してください。
- ◆ **【安福】** 研究ってめちゃくちゃ楽しいんですよ。やったらやっただけ。おそらく先生のほとんどがそうだと思います。しかし、そのテーマについては、当然大事ですが、結局それは先生の研究なので、ぜひ自分の手で自分のテーマを見つけてほしいと思います。
- ◆ **【松岡】** 「環境が変わる」ことによって社会や集団、個人のレベルで大きな影響を受けました。社会や団体ではルールや規範を、個人は行動様式や習慣を調整して対応しました。私たちが携わる「環境を変える」という職能は、集団や個人に対して同様のことを求める可能性があることを考えておきたいと思います。
- ◆ **【寺川】** この困難をどう乗り越えたかは、将来必ず大きな糧になると思います。『ニューノーマル』の時代は、まだ誰も経験したことがないチャレンジングな社会です。何を残すのか？何が変わるのか？各々が当事者であり専門家になれる時代です。いまは、「相互不信」が生じないように情報共有し、実感や信頼が伴う関係形成が大切です。「縮尺(立場や環境)を超えた想像力」を発揮し、互いにできることから始めることが特効薬です(本ワークまとめ「さいごに」より)。

# 他学部 専門家教員 との書簡より①

## “オール近大”新型コロナウイルス 感染症対策事業担当教員

近畿大学社会連携推進センター 安田直史 教授  
近畿大学人権問題研究所 熊本理抄 教授

安田先生 熊本先生

この度は、お世話になります。建築学部の学生がコロナの濃厚接触者となったことを契機に、私自身、真に学生の気づきにつながる方法等についていろいろと逡巡していたところです。

そこで、ゼミ内でワークショップを行ったのですが、やはり専門的な対応が必要ではないかと思い、熊本先生に相談させていただいたところ、安田先生をご紹介いただきました。なにぶん手探りで進めておりますので、一度ゼミでワークなどができればと思っており（4回目のワーク）、先生にご相談させていただきたくご連絡いたしました。

現在、学部にて、私のゼミワークをもとに学部の1年生と4年生にアンケートを実施し、中間報告としてまとめています

◆ 相当本格的な介入、調査をされていることも、添付いただきたい報告書を拝見して感銘いたしました。この場合学生の意見は当然多様であり、それはそれとして尊重しつつ、自分の行動にあたって“informed decision making”ができるようにすることが大学の役割だと思います。調査報告書にいくつかの興味深い点が指摘されている様に思われましたので以下、いくつか私の考えと感想を述べさせていただきます。

1. 「自己責任」「…誰が責任を取ってくれるのか」など、「責任」という言葉が繰り返して出てきたことにも注目しました。感染症において感染する、しないことを「責任」でとらえることは非常に危険だと思っています。もちろん各人を守る責任は自分自身にあり、国にもそれを保証する義務があるのですが、感染したものが「悪」とすると差別偏見を助長することになったり、「良いコロナ（注意していたのに罹った）」「悪いコロナ（不注意な行動が原因で罹った）」の様な区別を生むことにもなります。過去の感染症（HIV、ハンセン、エボラ、など）から「差別偏見」は逆に感染症対策を難しくすることがわかっています。特にCovid-19のように飛沫、エアロゾルが主たる感染源である場合には、いくら注意しても完全に予防できるわけではないので、要注意です。マスクも含めて感染することを中立的にとらえる努力が必要です。以上は原則的なものですが、もう少し具体的には
2. Covid-19は「ものを介する感染が主要である」など、事実の誤認がみられる点は重要です。雑多な情報が飛び交い、「正しい」知識自体も刻々と変化している中では非常に困難ですが、少なくともさらなる努力が必要な点かと思っています。
3. 今回先生は「自分ごと化」と「同調圧力・災害心理バイアス」は非常に重要なポイントを指摘されていると感じます。如何に「自分ごと化」するのか、させるのか、ということはCovid-19に限らず、様々な社会課題に対して大学生教育の最大の課題ではないかと感じています。自粛勧告があるか無いかに関わらず、会食に参加することに対して、同調圧力や災害心理バイアスに惑わされずに自分で自分の行動を判断できるようにする教育が大切なのだと思います。
4. そのなかで、諸外国の取り組みを理解して比較的・相対的に日本を考えるとということも重要ではないかと考えています。少なくとも英・米では感染した人に対する差別、偏見というのは非常に少ない様です（アジア人差別という別の問題がありますが）、またコロナ対策にボランティアとして関わる人が多数募集され、それに対して多くの希望者が集まるなど、この問題を「政府の問題・責任」ではなく「自らの問題・役割」を考える人が多いように思われます。「文化の違い」で済ませるべきではないと思います。
5. 最後に、過去の事例が示すように感染症対策は啓発と行動変容に依存するだけでは不十分です。「学生を管理すること」が目的ではなく「感染症を抑え込む」ことが目的ですから、今後の関心の重点は速やかに「予防接種を受ける」という行動にシフトすべきだと考えます。近大でも始まりましたが、若者の接種希望率はさほど高くない様です。先生がなさってきたようなワークショップを通じて上の2, 3を改善していくことが重要なのかと思います。

（安田直史）



# 他学部 専門家教員 との書簡より②

## “オール近大”新型コロナウイルス 感染症対策事業担当教員

近畿大学社会連携推進センター 安田直史 教授  
近畿大学人権問題研究所 熊本理抄 教授

安田先生 熊本先生  
先日のZOOM会議ではお世話になり、貴重なご意見を賜りありがとうございました。  
先生方のお話を受けて、昨日土曜日に学生と3回目のワークを行いました。  
ゼミ生が、他ゼミ生もよんで、1~4年生の自由意見等を整理し、アンケートの項目作りを手伝ってくれました。  
とりあえず版ですが、一度ご覧いただきご意見いただけないでしょうか？（建築学部の先生方にも見ていただいています）気になる部分がありましたらご指摘いただければ幸いです。  
お忙しいところ恐縮ですが、簡単に結構ですのでお目通しください。

- ◆ 非常に貴重な学生の声を聞かせていただき、勉強になりました。特に自由コメントを興味深く読ませていただきました。
- ◆ やはり当然のことながら「人それぞれ」で、各自が考え方も行動も試行錯誤している様子がよくわかります。ある意味健全で正直です。
- ◆ 学生は彼らなりにいろいろ事情と問題を抱えていることは明らかだし、本当は困っているけど声を上げられない学生をどう見つけるかということが大切なのでしょうが、登校が無い状況ではなおさら難しいですね。
- ◆ 大学からのマス発信については周知度は低いですね。災害時の安否確認もそうですが、実効性には欠けますね。ただ、対案となると難しいのですが、授業を通じて学生に話かけることをもっと考えた方がよかったですかなと思います。個々の教員が心がけて声掛けをすれば、マスよりはいいのでしょうか、正直なところ大学教育でどこまですべきかという点でちょっとジレンマを感じます。他に、コロナに関する個別相談というチャンネルがあったら（私が知らないだけであったのかもしれませんが）よかったかもしれませんね。
- ◆ 先生の言われた災害バイアスや同調圧力についての意見や考察があまり学生からは出ていないのが興味深いです。これは自分の決断、行動に影響を与えていることを自覚していないということなのでしょう。
- ◆ 概要のところで感じたことを2点。「自分が感染または検査した人が8.4%（78人）、家族や親族・身近な友人がかかった11.3%（106人）、知人友人にいる30.0%（280人）」というのはかなり高い数字ではないかと感じました。
- ◆ また、「全体と反対意向にある人をピックアップすると、自己責任で大丈夫は、「自分が感染・検査した」ほうが同意傾向、「友人知人などにいる」人に反同意傾向。「自分が感染・検査した」人の方が「若者はあまり深刻でない」と感じている。」の部分の解釈は複雑ですね。因果関係の方向は何とも言えません。
- ◆ 工夫されたワーク方法、結果共有に至る過程など、膨大な時間とエネルギーを学生自身の学びにすえて尽力されたことに敬意を表します。こうした教育的営みは平時にこそ必要で、一過性のアンケートでなく複数にわたって学部全学生に実施されたとも感銘を受けました。
- ◆ 自由記述に学生の驚きが記されていましたように、情報源が新聞やテレビという学生が7割ということに私も驚きました。そのことを踏まえたうえで、学生が情報に対して根本的にもっている不信は根深いように思います。SNSやネットの情報だからでなく、そもそも新聞やテレビを含め、「情報」そのものに対する不信があるのだと感じます。
- ◆ 能動的情報収集より受動的情報収集の態度が浮かび上がります。学生の言葉ばを借りれば、「世間の認識にニュースの効果は絶大…情報操作も容易に行われてしまう」という指摘は重要です。
- ◆ 「理解」と「行動」の不一致についても多く言及されています。知識だけでもだめで、身近に感じるだけでもだめ。もっと分析するといろいろと見えてきそうですし、人権や差別の問題にもつながりそうです。
- ◆ 「大人数の人と認識が同じ」であることを確かめて安心する意見もあれば、自分とは異なる意見を理解しようとするコメントもありますね。
- ◆ 一人暮らしと実家暮らしの学生の間での齟齬、世代間にみられる不信など、コメントを読みながら複雑な心境になりました。とくに一年生の一人暮らしの学生が置かれている孤独と、家族と暮らしているからこそ感じる不安、対立でなく理解が深まるのか考えさせられます。
- ◆ あと学年別で自由記述欄に違いがあるなあと思いました。4年生のなかの意見の多様性（というより二極化）が気になります。
- ◆ このワークをつうじて自分の行動、思考、理解、認識を振り返る機会になったという意見に調査の成果があらわれていると思います。そうした気づきは教員がパターンリストに伝えるより、学生間で意見を交わすことに意義があるのだとも思いました。少数意見の学生の声にも理解や目配りがあって学生はすごいなあ、と反省もしました。
- ◆ これだけたくさん意見を自由記述に書くということは、自分の意見を聞いてもらう機会がほんとうにないのかもしれない。その点からもとても重要な調査だと思います。

（安田直史）

（熊本理抄）

## 【自粛や行動意識、自己責任について】

- 数値化すると改めて身の回りにコロナ感染者とその関係者になってしまった人がこんなにもいたのかということを実感した。
- 全ての人が視野を広げ医療崩壊を起こさせないためにもしっかり自粛する必要があると改めて感じます。
- コロナによって友達の間での考え方の違いを実感することが多くなった。人にうつつさない、周りに広めないためにも自分がかからないような行動をすべきだと思う。
- 高齢者と同居しているため不安がある。自分も一人暮らしならここまで警戒することはなかったと思う。友人の誘いを断るのは慣れた。
- 人によってコロナに対する恐怖心や警戒心に違いがあることは肌で感じていました。
- 自分のことしか考えてない人が増えて来ている。
- これだけ被害が出ているのに、大した病気ではないと思っている人が2割もいることに驚いた
- 僕は元々外出したり、友達と遊んだりすることが少ないので、自粛を強いられているこの環境についてそこまで不満を抱いてはいない。しかし、自粛をしない人々に少し苛立ちを感じることはある。僕の知り合いで口では「自粛しなきゃ。早く元の生活に戻ればいいのにな。」と言いながら、外に遊びに行ったりしている人が少なくないからだ。誰とは言わないが数少ない大学の友達にもそういった人がいる。しかし、自粛という言葉は「自ら行動を改める」ことを意味した言葉であり、強制力が弱いことから、仕方がないと思う自分がある。そういった自粛『外出をしないこと』をしない人は、これからの付き合い方に少なからず役に立つのでは無いかと少々前向きに考えている。

- 自己責任なら自由に行動して良いと思っていない人が半数を占めていたり、大多数の人が自粛をするべきだと言う回答をしているが、頭では自粛しないとイケない、外出をするのは良くない、自分だけの問題じゃない、と分かっている、実際に自分の行動を振り返ってみると言動が矛盾している人は多いと思う。
- 15%程の人が問題ないと考えているような思いが感染者数が増える原因の一部ではあると思います。コロナ対策は自分のためではなく周りの人のためにすべきであると強く感じました。
- 自分の住んでいる地元で中高生がみんな登校していることに疑問を感じる。大学生が自粛しているのに、矛盾しているように思う。
- 友人が感染を気にせず集まって、遊んでいる様子をインスタなどに挙げているのを見て、意識の低さに驚く。
- 自分はコロナの感染は怖い、学校がオンラインのままであることは必ずしも良いとは思っていませんでした。普通に通学ができていた大学生もいるのに対し、私は生活必需品の買い物以外外出せず、1日パソコンに向かう日々だからです。今回の結果を見て、同じように二律背反的な感情を持っている大学生が多くいることに安心しました。また、心理バイアスの話を聞き、ニュースや大学からのメールで正しい情報を収集し、感染対策を心がけて気を緩めることなく生活していこうと思いました。
- このアンケートでは自分の認識や深刻さ、情報の取得ルートなどがほかの人とあまり相違がないことが分かりました。しかしニュースなどで見る路上で飲み会をしている大学生などがいる以上このアンケートの結果と実際の認識ではずれがあるのではないかと思います。

- いろいろなバイアスがかかっている話は非常に心当たりがあります。先生が実際に感染されて話をきくまでは、自分の周りでは感染してる人がいないし感染したとしても大したことないんじゃないかと考えていました。けれど、かかる時はどんなに気をつけていてもかかるし簡単に重症化してしまうと知りました。この状況が一年以上続いてみんな慣れ始め危機感が薄れている時だからこそもう一度バイアスがかかっているか改めて確認すべきだと思いました。今回の調査では、自分の身より自分の周辺の人たちへの影響を心配している人が多いことがわかりますが自分の意識次第で周辺にかかる影響も少なくすることができるので感染対策を続けていこうと思いました。
- 自己責任だと考える人が意外と多かったが、自己責任のつもりで行動した結果病床を圧迫し医療崩壊に繋がったり、自覚症状がないまま感染を広げたりするかもしれないことをもっと重く受け止めてほしいと感じた。私はいつも悪い情報ばかりを信じ最悪の自体ばかりを考えてしまうので、自己責任を言い訳にする人や自分だけは大丈夫だと思っている人達はあまりにも楽観的で正直羨ましさすら感じる。
- 私が3年生の時は、毎日授業と課題で朝から夜までパソコンに向かう生活ばかりだったので、辛かった思い出の方が印象に残ってます。大学で友達ができにくい環境にある1年生はよりストレスが溜まるのではないのかなと思い、対策が必要だと思います。コロナが起きてから、人間関係の構築の大切さや、悲観するだけでなくどう前向きに 対処していくか検討することが大切だと実感しました。

自由コメント

ワーク  
まとめ



## 【情報・意識差について】

- メディアで若者が害であるかのように扱われ、偏った情報しか流されていない感じ。何も信じる事が出来ずにいるのが辛い。
- ワクチンの安全性を信用しきれず打とうか悩んでいます。若者がどのくらいワクチン接種を打ったのか、もしくは希望しているのか気になります。若者が強い副作用を伴いながらワクチンを受ける必要はあるのか疑問。
- 正直コロナに関する情報にあまり詳しくなくてとりあえずマスクすればいいんでしょ、みたいな捉え方です。感染者は増えたり減ったり、緊急事態宣言も出たり、解除されたりで今後私たちはどうするべきか、どうなっていくのか考えてみようと思います。
- ニュースで連日報道されているとおり、沢山の感染者と死亡者が出ている日々が続いているが、どこか他人事のように聞き過ごしている人が多いのかもしれない。そんな人々により事態の深刻さを受け入れてもらう重要なアンケートになったと思う。
- SNSなどを見ていると自粛を徹底している人とそうでない人とで分かれているように思います。何が正しく、何がダメかの境界がすでに曖昧なように思います。
- 人が抱く思いはそれぞれあるんだなと思いました。深刻と感じている人が8割もいることから他人事では済ませられないのだと改めて感じます。若者はかかりにくいやそこまで重要視する必要がないといった意見もありましたがやはり一人一人がコロナ問題に対して真剣に考え行動をしていかなければいけないのだと思います。けれどSNSが情報源になっているということもあるのでその情報が本当かどうかを見分ける力も必要もあると思います。なので幅広く情報を取り入れることがこれからできる自分の対策だと思いました。

- 結構な人数が新聞、テレビから情報を受け取っていて、SNSが情報源という人が1割に留まっていることに少し驚いた。
- コロナに対する印象や日本の現状に対する印象が他人とあまり違いがないと感じた。それは、今の情報の仕入れ先の大半がテレビからという共通点があるからではないかと考えた。私たちが受けているイメージは全体的にまとめると「悪い」というのは変わりなく、ニュースによる世間の認識にニュースの効果は絶大だと感じた。よって、情報操作も容易に行われてしまうのだと考えた。
- コロナ禍でどこまでして良くどこからが悪いのかの判断が難しいことはわかるが、明確に発信してほしいということには共感した。近大でもワクチン接種が始まるが、TwitterなどSNSでは、摂取する人は頭がおかしいなどという呟きも見かけるように、ワクチン接種に対してかなり否定的な人がいることも確かだと感じる。ニュースで情報を得る人が大半という結果だったが、オリンピックに向けて操作された情報ではなく、偽りのない情報を知るにはニュースでは駄目だと感じている。情報の取捨選択が大変だと感じた。

## 【社会への関心】

- 今まで政治に関心がなく理解していなかったがこのような非常事態になり、税金の無駄な使い方や利害関係があつて動いていることが顕著になって今まで無知だった自分に対する怒りと直接手の届かないところで行われていることに対するもどかしさを抱いた。
- 家族が感染した経験を経て思うことは、感染対策に焦点を当てすぎず、感染後の対応を政府や自分たちで考えなければと思う
- 飲食のほかにも助けなくてはならない施設などがある。

- コロナに対する施策に賛同している人が少ないがためにマスクをしていない人など意識の低下を招いていると感じる。誰かが責任を取り、義務を強いるほどの力が必要。
- コロナはマイナスな点はあるけれど、社会の新たな進化につながる機会でもあるので、利点もある。

## 【授業方法や大学について】

- 大学は学生の安全の確保や勉学のサポート、世間体、色々考えないといけないので大変だと思うが、どうか真の大学生活をおくれるようにしてほしい。
- 通学したいです。ですが、オリンピックの開催や規制の緩和により、9月ごろからまた緊急事態宣言が発令されないかが不安です。
- 思うような大学生活を送れていないのは皆が同じ状況で仕方がない。オンライン授業という形であるが、学びの環境を与えてくれている大学へはとても感謝している。しかし、オンラインでは対面授業と同じくオリティで授業を受けることができていないと感じていると思う。その中で学費については多くの学生が納得できていないこともあると思う。
- バイト解雇や授業料、生活費の捻出が厳しい時期がありました。下宿である上にひとり親で、経済的にも精神的にも厳しい状況が続きました。学校にはもう少し学生に寄り添った対策や対応をしていただきたかったと思います。
- 下宿生のほとんどが実家に帰っているのですぐには大阪に戻れません。生活場所が実家になるか下宿先になるか分からない期間が続くので、アルバイトなど学生として大切な授業以外の社会活動が営めないことに困っています。

自由コメント

ワーク  
まとめ

- オンライン授業と対面授業が入り交ざった今、授業によってはオンラインの方がやりやすいなと思うものもありました。学校に行くのが面倒くさいとかではなく、効率の面から見てそう思いました。Afterコロナでは、部活やサークルなど、大学でしかできないような人との交流は活発にさせてほしいと思います。一方で、オンラインを完全に廃止して対面に切り替えるのではなく、継続する授業があってもいいと思いました。
- コロナウイルスがまた広がってきている中で、自分の行動に対してもっと責任をもとうと思えた時期でした。これからうまくこのウイルスと戦っていく中で、自分自身の責任を忘れずに精神的に頑張っていくつもりです。
- コロナウイルスに関する知識を得ることができました。
- コロナウイルスの影響で今までの常識が覆る瞬間が何度もあって、新たな日常の在り方が生まれましたね。変わって行く時代の流れに乗らないと生きていけないことがコロナウイルスのおかげで分かりました。考えない人は死んでいく世の中になった気がします。大学の4年間で、将来日々変わって行く世の中で死ぬ人ではなく生き延びる人になるための考え方や価値観や知識を蓄えないといけないと感じさせられました。
- コロナに関してだけを考えることがなかったので、良い経験になった。ワクチンを打ったあとも、このまま対策を続けていきたいと思った。
- コロナに気をつけつつ学校生活を充実させたいです。
- コロナワークを通して様々な方達の意見を知ることができ新たな気付きがありました。より危機意識が強くなったので今感染者数が増えつつありますが今後も気を抜かないでしっかり対策したいです。
- どの年代ももっとコロナに危機を持つべきだと思います。
- 早く平和な世の中になりますように
- とりあえず自分自身がやるべきことはしっかりしていこうと思います。
- 家で一人部屋がなく、中学生の妹と同じ部屋でさらに今学校がオンラインで家にいる時間も多いためストレスでしかない。今までは祖父母の家に行けてたけどいまはコロナをうつしたくないからできるだけ行きたくない。そのためひとりできつろげる場所がないのでつらい。
- 感染者数がとても少ない県から大阪に来たこともあり、他の人よりもコロナに対する恐怖心も割とあったので消毒などは欠かさず行っていたが、今回の学習を通してさらにコロナ対策の大事さや脅威を深く知ることが出来たのでそれを忘れずに生活していきたい。
- 軽率な行動で周りに被害を与えないよう常に意識する
- 個人的にいっそのこと前期はすべてオンラインがよい。定期を買う稼働が微妙な回数だし、感染も再拡大し始めていて、いままでオンラインでできていたのに対面に戻す必要がないと思います。
- 厚生労働省の医系技官が会食をしていたり、日本医師会の会長がパーティーをしていたり、医学のスペシャリストがこういう行動に出ているということはコロナがそこまで怖いものではないということを暗示している。近畿大学医学部の先生が自粛がどうかおっしゃっても医学のプロかもしれないが自粛など経済的なプロではないのであまりにも信用できない。正直インフルエンザ程度ではないのかとも思う。オリンピックはやって、体育祭や運動会ができないのは矛盾してるし、オリンピックを無観客にするために4度目の緊急事態宣言を出したようなものだし、コロナ自体が政治的パフォーマンスだと思う。若者のコロナ致死率が低く、未だワクチンの治験状態なのに大学が学生に接種を強要しているような状態には理解ができない。
- 今回のワークで自分の意見と同じところ、違うところを知ることができ、自分とは正反対の意見を持っている人もいるということを確認させられました。これからも自分ができる感染対策をしっかり行って、友達や家族に感染させないように気を引き締めていきたいと思いました。
- 今回のワークを通して、自分ひとりだけでなく、同じ学部の人たちの考えを知ることが出来たのはとても良かったと思う。また、私が関わっているコミュニティの中でコロナに関して意見交換をするよききっかけにもなり、私たちがコロナに対して思っている事を言葉に出して整理する機会を与えてもらったとても良いものだったと思う。
- 今回をきっかけに今まで脅威だと恐れていたコロナのことをより一層対策を取り、自分だけでなく周りの人のことも考えて行動したいとあらためて実感しました。
- 学校の授業体型がコロコロ変わったので完全リモートにするなど変化させない判断を早くしてほしい。
- 自分の行動に責任をもって生活していきたいです。
- コロナ対策をしないような人はアンケートも真面目に答えないと思うのであまり意味があると思えない。
- 身の回りだけでなく、学年を問わず様々な意見を参照することができてとても有意義なアンケートだと思います。大学ならではの柔軟な開発や講義に繋がる内容であるとなお興味深い機会だなと思います。
- 人と会う機会を減らし、手洗いうがいを徹底するなどこれからも新型コロナウイルスの予防に努めていきたい。
- 前回のアンケートでより一層コロナに対して危機的意識を持つことができました。いつまで続くのかわからないこの状況で、たくさんの方が精神的ストレスを感じていると思うので、自分は、ストレスをため込まないようにストレスを解消することが合できる自分に合った方法を日々見つけていきたいです。

最終アンケート②  
より

1年生

ワーク  
まとめ



- 人それぞれコロナに対する考え方が違うのだとこの調査を機に改めて感じました。コロナに対する危機感は去年に比べたら薄まりましたが、まだまだ手洗い消毒マスクなどは続けていかなければならないと思いました。
- コロナが建築に与えるものが容易に想像できないが、考えることが楽しそうだと思います。今後もコロナの情報を取り入れて正しい行動ができるようしたい。
- 今回のワークでみんなが思っている本音を確認することが出来、共感することもあるれば、それは違うのではないかと思ったこともあった。でも考え方は人それぞれなので自分が思っていることも絶対ではないと感じた。
- テストは対面にするのはおかしい。偶数、奇数で対面、オンラインにしているのに、1日に全ての生徒が登校することになると密になりかねない。コロナに感染するリスクが高まる。よってテストもオンラインにすべき。
- なんでもいいから、朝の満員電車を避けるようにしてほしい。電車はソーシャルディスタンスが100%取れないから、マスクしてない人やせき込んでる人から離れることができない。学校での感染対策は十分だと思うから、学校以外にも目を向けてほしい。
- 近大でワクチン接種が始まり、打つかどうか迷いましたが打つことにしました。家族で一番打つのが自分だったためとても不安が大きく、親からとても心配されました。ですが、接種し、私が打つことで周りの人のためにもなるし、自分の大切な人のためになっていることを実感しました。変異種がやはりはじめ、これから感染者数が増えていくかもしれないですが、はやくマスクを外して笑いあえる未来がくるまで、予防に気を抜かず頑張ろうと思いました。
- もちろん自分と違う意見の人もいたが、とても同意できる意見が大半だったので安心した。感染者数の減少や緊急事態宣言の解除という見かけのことだけで判断せず、自分の行動をもう一度見直すきっかけになった。この状況だからこそできることを頑張っって自分を成長させたい。
- メディアによる洗脳が激しく、日本人は疑問を持たないのが不思議で仕方ない。
- 前期はオンラインで行ってきたのだからテストもオンラインにし、後期から対面授業形式が良いと思いました。
- 近大の情報発信をみないといけなと言われる先生方がいるのですが、この頃見る意味がわからなくなってきました。自身の情報・考えとの整合性を見るために今は閲覧しています。しかし、情報の大半はニュース・新聞や府のサイト、政府のサイト等を見れば同等以上の情報は入ります。状況分析や警告も、自分で考えられるのではと感じます。目的は、ニュースを読まない・見ない層に向けて現状を正しく認識してほしいのだと思いますが、これらの層が近大の情報だからといって読むでしょうか。極論かもしれませんが、読むのは危機感を持っているか、情報を知りたいと思っている学生だけで、これら近大のサイト・メールでの情報発信では学生に状況を共有することに限界があるのではないのでしょうか。(中略) コロナの感染が怖くて大学に行くことが不安な生徒が外食などの外出をそれほどするでしょうか、大半の保菌者(特に感染拡大時)は外で遊んだり食べたりと活動が活発なもの。つまり彼らはコロナを恐れていません、そんな彼らが検査を受けるでしょうか。(後略・全文は資料編参照)
- 今の状況を悲観的に考えるのではなく、今だからこそできることを前向きに考えるべきだと思う。
- アンケートを通じて自分はコロナに対して知っているようで知らないことが多いと気づきました。
- アンケート結果から様々な意見を知ることができ、学ぶことが多かったです。
- コロナだけでなくこれからもどんな感染症が流行るか、どんな災害が起こるかわからないので、しっかりと国や学校の情報を理解して行動に移したいと思いました。
- コロナ早くおさまって欲しいです。
- 今回のアンケートの主旨とはずれるかも知れないが、本当にオンライン授業はやる気が出ない。授業を受ける空間、雰囲気、設備で生徒のモチベーションが変わると思う。対面だとやる気が出て質の高い授業の受け方ができる。どうか早く全授業対面にして欲しいと思う。
- 大学にほとんど行けてない中、テストだけ全員で対面で実施とあるが、それならもう少し授業も対面で受けさせて欲しい。私たちの行動ばかり制限され、建築学部の半数しか来ない授業も2週間に1度しかないのに、全員が集まるテストを実施すべきなのか疑問に思う。
- オンラインと対面を交互でなく、どちらかにしてほしいです。理由としては例えば2限オンラインで3限から対面となると通学時間が2時間かかる私にとっては2限から大学にいかなければならないのでどうせなら2限も対面がいいです。また、奇数、偶数で対面、オンラインと交互で登校するやり方は生活習慣がごっちゃになるので、体調を崩しやすく友達や私も崩しました。
- 友達が全然できなくて、わからないところを聞く機会もなくて、大変で泣くこともあります。今が自分に課せられた試練だと思って頑張れる。高校の時の友達がいるから頑張れる。政府に対しての不満は消えない。

最終アンケート②  
より

2年生

ワーク  
まとめ

- オンラインでも学生同士が共同でできるような建築の授業を考察するのはどうでしょうか？（例：建築の演習などでのオンライングループワークなど（Google spreadで、講義時間内に、共に案を出して作業するなど）
- オンライン授業が多くなかなか学校が行けない状況が続き、難しい時期を過ごし続けていると感じますが今の状況をなるべくポジティブに考えることが重要だと感じました。僕自身もポジティブに捉えるようにしています。
- コロナウイルスがはやり始めた時はお出かけできないことや外食できないことがすごくしんどいと感じたが、今は慣れてきたと同時に、出かける以外の新しい楽しみを見つけられるようになった。その楽しみは身近なところでの小さな楽しみが多いので、今まで気づいていなかったのだと思う。ただ、家にこもっている中で、外出しないと精神的に元気がなくなってしまうように感じる。私は下宿しているので、スーパーで買い物をするときとアルバイトのときに外出するが、時間がない、目的がないなどの理由で外出できない人は辛いのではと思う。
- コロナウイルスによる自粛が長くなり家にいる時間が長い影響で、様々なことに対してやる気が薄れてきている自分がいるため日々の環境の中で変化がほしい。
- ワクチン接種の実施数が増えているので、それが多少なりとも良い方向に向いて欲しい。3年生で就活を意識して忙しくなるにつれ、去年の夏をもっと自由に過ごしたかったと強く思う。
- コロナが完全に収束する頃には就職して毎日忙しくなると思うので今を存分に楽しめる方法を見つけないか。
- コロナを軽く見て軽率な行動をしている人は重く受け止めて改めて欲しいと思った。
- コロナウイルスは不確定な要素が多く、それぞれの価値観も違うので自主的な活動自粛は難しいなと思います。政府がもっと具体的な方針を述べて、ある程度の強制力を持たなければ収束することはないと思います。真面目に自粛している人が評価されるような世の中になって欲しいです。
- テストは対面なのに初回ゼミはオンラインなので、初回ゼミも対面にしてほしいと思った。オンラインだとなかなか仲良くなれないし、はじめが肝心だと思った。人数も少ないので初回ゼミや今後のゼミも対面を強く希望する。
- 違う考えの人がいることは仕方ないことではあるが、やはりいろいろな立場の人がいるからこそ、コロナが収束する方向に向かって我慢するしかないと思う。
- 確かに、大学の友人で感染したという話は身近に聞かないため、あまり危機感を持ちにくく、もう自粛がしんどいという意見も十分理解できる。しかし、自分の行動によって自分ではない誰かが感染し死の危険にさらされる可能性があるということは十分に理解してほしい。ただ家で何もせず自粛するだけでは、どうしても飽きがきてしまうと思うので、自粛の中での楽しみを見つけしてほしい。
- 現状コロナは改名されていく事もあれば、変異株のように謎に溢れた事が出てきている状況です。個人独断での勝手な、軽率な行動はこの先も暫く控えていかなければならないなと感じています。リモート講義が主流である中、自分自身も柔軟に現状に馴染んでいかなければならないなと思います。
- 東京オリンピックが無観客になるかどうかの議論そして東京での4度目の緊急事態宣言など対応が遅れている気がする。
- 客観的に見れる機会ができて良かった
- ここに来て優先的にワクチン接種が行われていた高齢者層の感染者数が落ち着いてきているという情報を見た。順調にワクチン接種が進めばafterコロナも近いのかも知れないと感じます。
- 個人的な経験としてワクチン打った後は筋トレをしない方がいいと実感しました。そして頭痛にはナロンエースが早く効きます。
- 自分の考えだけではどうにもならない問題だと思うので、ワークを通して様々な人の意見を知れてよかった。
- 全てとは言わないがメディア等の切り取った情報をもっと国民が信じてしまっている印象があった。完璧な対策・対応はないと思うので批判するだけの報道は信じすぎない方がいいと思う。新型コロナに関する我々の情報源はメディアしかないのかも知らないが、事実のみを客観的に捉えていく必要性が今後はあると思う。
- 多くの人が感染対策として外出自粛をしていたとしても、少数の人が外出をしてしまうことで感染拡大が防げていないから、外出自粛できてない人がこれだけいると見せるのではなく、こんなにも多くの人が感染対策として外出自粛をしているから、少数の人が自粛すれば感染を防げるのだと伝えた方がニュアンスの違いではあるが効果がありそうだと感じた。
- 多くの大学生が今の学習環境に自分と同じように不安を持っていることが分かりました。行動が制限されている中で何かにチャレンジしようと思うと主体性が重要になってくるおもいます。しかし私は周りの人とのかわりも少ない中でなかなか一歩踏み出せないなと思うことが多いです。

最終アンケート②  
より

3年生

ワーク  
まとめ



# 自由意見やワークコメント原文

- 学費が払えない？なら特待生にでもなって学費を免除にするよ。大学、それも私立の大学に行くことは、当たり前的事なんかじゃないぞ？学費は誰が出してるんだ？それを大学のせいにするのは、結局オマエの勉強しない言い訳。4年間の学費合わせりゃ安いベンツぐらいは買えるんだ。ごちゃごちゃ言ってる暇があるなら、勉強するかお金を稼げ。コロナが明けたとき、日本はもっと貧しい国になる。元通りの日本なんかには絶対に戻らないぞ。遊べないだの、ゲームしたいだの、飲み会したいだの、人生の夏休みだの、頭の中でお花が咲き乱れてるぜ。関係ないね。
- 大阪はまん延防止対策に切り替わり、小さな劇場だと100%の観客を入れることができるようになっており、減ってきてはいるがすぐに第5波が訪れるかもしれないのに100%収容人数を増やしていることに疑問を抱いている。(中略) チケットをより売りたいという気持ちでチケットを売ってしまうと舞台を行う期間に大流行してしまい、舞台自体を行うことができず、役者さんの舞台の場を奪ってしまうのではないかと考えてしまう。それは東京オリンピックの開催についてもいえる話だと考えている。有観客にするのか無観客にするのか政府と地域の人が揉めているイメージがある。政府は経済を回したいという強い思いがあるので有観客にしたいという気持ちと宮城では復興した地域をよりしてもらいたいため有観客にしたいのではないかと考えている(中略) どうすべきか難しいことではあるが、都市を作っていくときに考える地域の人中心にして考えをまとめていかないと有観客にして町を訪れた観客が地域の人からの視線をすごく感じて応援しようという気持ちが薄れてしまうのではないかと考えてしまう。地域と政府のコミュニケーションの取り方がやはり問われていると感じる。(全文は資料編参照)

最終アンケート②  
より

3年生

ワーク  
まとめ

## アンケート②自由記述から

- これからも感染対策に努めていきたいです。
- これからも感染対策をしっかりと行い、周囲の人たちの迷惑にならないように心がけたいと思った。
- コロナウイルスに気を付けて行動しようと思いました。
- コロナがきっかけで遊びばかりであった大学生活から将来を考える時間が取れたり勉強出来たりし、個人的にはこのコロナの機会に感謝している部分がある。一方で友人との交流が少なくなり、精神的にもつらい時期があったので対面での交流の機会を設けるべきであると感じた。オンライン交流では表面的な関係しか築くことができなかったということを実感したため、対面であるということは重要であると思う。
- ほとんど大学に行けてないので、学費の割引等をして欲しい
- ワクチンの効果を信じているが、ワクチンを打ったからといって自粛やマスクの生活をやめる人が増えてしまい、感染拡大してしまうのは避けたいと思う。
- 改めて考えさせられました。ありがとうございました。
- 元から感染対策には気を使っているつもりなのでこのワークで新たに得るものは少ない
- 現在、自分がしている対策が完璧に出来きれているかはわかりませんが十分に情報を得て、対策できるよう心掛けたいと再度感じました。
- 今回のワークショップでコロナに対する理解が深まった。
- 選挙に行こう！

最終アンケート②  
より

4年生

ワーク  
まとめ